玉勝間花月草紙琴後集鈔

375.9
Yo19
資料室

42061
教科書文庫
4
810
41-1939
20000
34767

資料室

375.9
K67

文部省檢定濟
昭和十四年二月十六日　中學校國語漢文科・高等女學校國語科教科用

吉田彌平編
石井庄司補訂

玉勝間花月草紙琴後集鈔

中等學校教科書株式會社

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 34767 圖書

例言

一　本書は、昭和十二年三月二十七日制定の新教授要目の趣旨に準據し、中學校・高等女學校第五學年の國語講讀用鈔本として編纂したものであります。

一　本書は、鈔本として能ふかぎり最もよく原本の全貌を窺はせんがために、種々意を用ひました。假名遣・送假名及び用字について統一を保たせた外には、原文の姿に對しては少しの變更をも加へてありません。

一　本書は、教授の能率を高め學習の効果をあぐるため必要と思はれるところには地圖・繪畫等を適宜に挿入することにしました。

昭和十二年九月

編者識す

本書を補訂するに當りましては、編者の本書編纂に對する主義方針を踏襲し、更に若干の新意を加へ、以て一層の完璧を期しました。

昭和十三年十二月

補訂者識す

玉勝間花月草紙琴後集鈔

目次

五藤冨士麿
解題……一
代語訳
一　驕慢の大人は古學のおやなる事……三
二　儒者の皇國の事をば知らずとてある事……三
三　もろこしぶみをよむべき事……六
四　新なる說を出す事……六
五　大神宮の茅葺なる說……八
稿の落葉
六　道にかなはぬ世中のしわざ……九

七　書讀むことのたとへ……一〇
八　新にいひ出でたる說はとみに人のうけひかぬ事……一一
九　おのが物學びのありしやう……一二
一〇　縣居の大人の御さとし言……一八
一一　おのれ縣居の大人の敎を受けしやう……二〇
一二　師の說に泥まざる事……二一
一三　わが敎へ子に誡めおくやう……二四
たちばな
一四　漢人の親の喪に身をやつす事……二四
わすれぐさ
一五　ひとむきにかたよることの論……二六
一六　前後と說のかはる事……二七
一七　學者のまづ難きふしを問ふ事……二九
かもあふ
一八　學ぶ〜事……三〇
一九　花のさだめ……三三
二〇　古き名所を尋ぬる事……三四
ふぢなみ
二一　おのれとりわきて人に傳ふべきふしなき事……三七
二二　唐土の老子の說まことの道に似たる所ある事……四一
二三　田舍に古の雅言の殘れる事……四四
秋の下葉
二四　田舍に古のわざ殘れる事……四六
二五　今の人の歌文僻言多き事……四七
二六　歌も文もよくとゝのふは難き事……四八
山　雪
二七　物學びのこゝろばへ……四九
なねかづら
二八　後の世は聞づかしきものなる事……五〇
二九　思ることを知るといふ事……五二

山ふ會
三〇　物學びはその道をよく擇びて入り初むべき事……三
おもひ草
三一　思ひ草……三四
三二　靜かなる山林を住みよしといふ事……三六
つら〳〵物
三三　一言一行によりて人の善き惡しきをさだむる事……三七
三四　古より後世のまされる事……三八
三五　道……三九

花月草紙　目錄
解題……六一
一　はしがき……六三
二　花……六四
三　月……六五

四　人方の塞……六九
五　學問……七〇
六　筆のいのち……七六
七　風流好むもの……七九
八　蝦夷の人……七九
九　はや鍋……七九
一〇　四季の雨……七九
一一　詞の外なる心……八〇
一二　那須餘一……八一
一三　理のまこと……八二
一四　花時の雨……八二
一五　黃金の袋……八二
一六　餘地……八四
一七　禪意……八四
一八　月なき夜中……八七

一九　日新の教……八九
二〇　友に交はる道……九〇
二一　心猛きもの……九一
二二　小民の歎……九二
二三　利害得失……九三
二四　年經る鯉……九四
二五　心の神……九六
二六　兩頭の蛇……九八
二七　時と勢と位……一〇〇
二八　蜂の羽蟲……一〇一
二九　人の評……一〇二
三〇　花見……一〇三

平城遺　歌文集

解題……一〇四

一　序……一〇九
二　清水濱臣の泊酒舍の記……一一〇
三　知足庵の記……一一二
四　隨時樓の記……一一四
五　安田躬弦の家の文臺の記……一一五
六　山水のかたかける繪を見る記……一一七
七　花を惜しむ記……一二〇
八　八月十五夜芳宜園にて曇る夜の月を見る記……一二二
九　初雁を聽く記……一二三
一〇　山里の紅葉を見る記……一二六
一一　雪をめづる記……一二九
一二　上田秋成がもとへ……一三二
一三　對月言志といふことを題にて書けることば……一三三
一四　月花のあはれをことわることば……一三五
一五　芳宜園大人の墓を祭る文……一三八

玉勝間

解題

作者　本居宣長、鈴屋と號す。享保十五年（一七三〇）伊勢國（三重縣）松阪に生まる。少時京に出で儒學を堀景山に學び、醫術を武川法眼に受けて鄉里に歸り、小兒科醫を家業として、傍ら國文學を研究した。寶曆十三年（一七六三）三十四歲の時、賀茂眞淵の門人となり、國文學の研究に專念し、遂に稀世の大學者となつた。その研究の結果は數多の著書となつてゐるが、その中でも古事記傳が最も有名である。享和元年（一八〇一）歿す。年七十二。

成立　本書は、宣長の六十四歲の正月から歿年たる七十二歲の頃までの間に書いたものであると言はれてゐる。本文は全部で十四卷、それに玉勝間目錄一卷を加へて合計五篇十五卷が文化九年（一八一二）

目次

まで に全部刊行せられた。

内容　本書は、宣長が多年研究に從事した結果、得たる所の考證・研究法・學說等を記した隨筆である。文章は平易にして暢達、しかも雅致を含み、理路整然として混雜なく、委曲を悉くして冗長に流れず、しかも語法に合し、擬古文としての標準を示すものである。

影響　隨筆としての玉勝間には鎌倉時代の徒然草の影響を認めることが出來ないではないが、兩者の間には多くの時間的距離があり、且作者の生活環境が著しく異つてゐるので、全然別種の如き觀がある。卽ち徒然草の作者の態度が消極的であり隱遁的であるのに對して、玉勝間の作者の生活態度は飽くまで積極的であつて、特に作者の豐富な學殖の上に立つて、古學を明らかにし、古道を廣めんとする意慾が隨處に溢れてゐる。

廣島大學圖書之印

縣居の大人
賀茂眞淵
國學四大人の一人
（遠江國）靜岡縣濱松在
明和六年（一七六九）歲
年七十三

古今集
古今和歌集
醍醐天皇の延喜五年に紀貫之らが勅を奉じて撰進した和歌集
二十卷

萬葉
萬葉集
奈良時代の歌を集めたもので二十卷

玉勝間

一　縣居の大人は古學のおやなる事

本居宣長（肖像畫）

漢意を清く離れて、もはら古の心・詞を尋ぬる學問は、わが縣居の大人よりぞ始りける。この大人の學のいまだ興らざりしほどの世の學問は、歌もたゞ古今集よりこなたにのみとゞまりて、萬葉などはたゞいとものの遠く、心も及ばぬものとして、さらにその歌の善き惡しきを思ひ、古き近きをわきまへ、又その詞をおのがものとして

古事記　元明天皇の和銅五年に太安萬侶が勅を奉じて撰進した我が國最古の歴史　三卷

書紀　日本書紀　元正天皇の養老四年に舍人親王らが勅を奉じて撰進した漢文で神代から持統天皇までの歴史を記述した書　三十卷

使ふことなどは、すべて思ひも及ばざりしことなるを、今はその古言をおのがものとして、萬葉ぶりの歌をも詠みいで、古ぶりの文などをさへ書き得ることとなれるは、もはらこの大人の教のいさをにぞありける。今の人は、たゞおのれ自ら得たるごと思ふめれど、皆この大人の御蔭によらずといふことなし。又古事記・書紀などの古典をうかゞふにも漢意に惑はされず、まづもはら古言を明らめ、古意によるべきことを人皆知れるも、この大人の萬葉の教のみたまにぞありける。そも〳〵かかる尊き道を開きそめられたるいそしみは、よにいみじきものなりかし。（一の卷）

賀茂眞淵
（上田萬年藏）

二　儒者の皇國の事をば知らずとてある事

儒者に皇國の事を問ふには、知らずといひて恥とせず。から國の事を問ふに、知らずといふをばいたく恥と思ひて、知らぬことをも知り顔にいひまぎらはす。こは萬づをかしめかさむとするあまりに、その身をも漢人めかして、皇國をばよその國のごともてなさむとするなるべし。されどなほ漢人にはあらず、御國人なるは、儒者とあらむものの、己が國の事知らであるべきわざかは。但し皇國の人に對かひては、さあらむも漢人めきてよかむめれど、もし漢國人の問ひたらむには、「我はそなたの國の事はよく知れれども、わが國の事は知らず」とは、さすがにえいひたらじをや。もしさもいひたらむには、「己が國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでか人の國の事をば知るべき」とて、手を拍ちていたく笑ひつべし。（一の卷）

三　もろこしぶみをもよむべき事

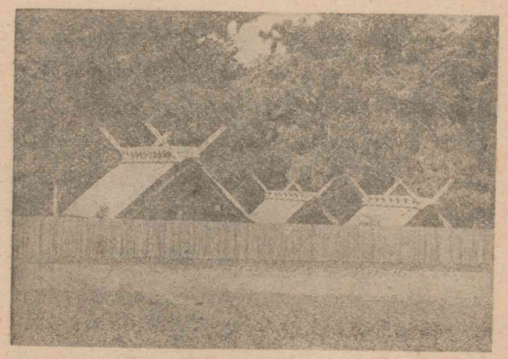
漢國の書をも、いとまのひまには、隨分に見るぞよき。漢籍も見ざれば、その外國のふりの惡しきことも知られず、又古書は皆漢文もて書きたれば、かの國ぶりの文も知らでは、學問もことゆきがたければなり。かの國ぶりの、萬づに惡しきことをよくさとりて、皇國だましひだに強くして、動かざれば、夜晝漢籍を見ても、心は迷ふことなし。然れども、かの國ぶりとして、人の心さかしく、何事をも理を盡くしたるやうに、こまかに論ひ、よざまに說きなせる故に、それを見れば、かしこき人もおのづから心うつりやすく、惑ひやすきならひなれば、漢籍見むには、常にこの事を忘るまじきなり。（一の卷）

四　新なる說を出す事

近き世、學問の道開けて、大かた萬づのとりまかなひ、さとくかしこくなりぬるから、とり〳〵に新なる說を出す人多く、その說よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、いまだよくもとゝのはぬほどより、われ劣らじと、よに異なる珍しき說を出して、人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。その中には、隨分によろしきことも、稀には出で來めれど、大かたいまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらむ勝たむの心にて、かろがろしく、まへしりへをもよくも考へ合はさず、思ひ寄れるまゝにうち出づる故に、多くはなか〳〵なるいみじきひがごとのみなり。すべて新なる說を出すは、いと大事なり。幾度もかへさひ思ひて、よく確なる據りどころを捉へ、いづくまでもゆきとほりて、たがふ所なく、動くまじきにあらずは、たやすくは出すまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、ほどへて後に、いま一度よく

思へば、なほわろかりけりと、われながらに思ひならるゝことの多きぞかし。（二の巻）

五　大神宮の茅葺なる説



皇大神宮

伊勢の大御神の宮殿の茅葺なるを、後世に質素を示す戒なりと、近き世の神道者といふものなどのいふなるは、例の漢意にへつらひたる、うるさきひがごとなり。質素を貴むべきも、事にこそはよれ、すべて神の御事に、質素をよきにすること、さらになし。御殿のみならず、獻る物なども何も、力の堪へたらんかぎり、うるはしくいかめしくめでたくすることこそ、神を敬ひ奉るにはあれ。宮殿又獻り物などを、質素にするは禮なく志淺きしわざなり。そも〳〵伊勢の大宮の御殿の茅葺なるは、上つ代のよそひを重みし守りて變へ給はざるものなり。而して茅葺ながらに、そのいかめしきことの世にたぐひなきは、皇御孫の命の、大御神を厚く尊み敬ひ奉り給ふが故なり。さるを、御みづからの宮殿をばうるはしくものし給ひて、大御神の宮殿をしも質素にし給ふべきよしあらめやは。「すべて近き世に、神道者のいふことは、皆漢意にして、古の意にそむけり」と知るべし。（二の巻）

櫻の落葉

六　道にかなはぬ世の中のしわざ

道にかなはずとて、世に久しくありならひつることを、俄に止めむとするはわろし。たゞそのそこなひのすぢを省き去りて、ある物

はあるにてさしおきて、眞の道を尋ぬべきなり。萬づの事を、強ひて道のまゝに直し行はんとするは、なか〳〵に眞の道の意にかなはざることあり。萬づの事は、興るも亡ぶるも、盛なるも衰ふるも、皆神の御心にしあれば、さらに人の力もて、え動かすべきわざにはあらず。眞の道の意を悟りえたらむ人は、おのづからこの理はよく明らめ知るべきなり。（二の巻）

須賀の直見
伊勢國松阪の人
宣長の門人

七　書讀むことのたとへ

須賀の直見がいひしは、「廣く大きなる書を讀むは、長き旅路を行くが如し。面白からぬ所も多かるを經行きては、又面白く眼覺むる心地する浦山にもいたるなり。又足強き人は早く、弱きは行くこと遲きも、よく似たり。」とぞいひける。をかしきたとへなりかし。

八　新にいひ出でたる說はとみに人のうけひかぬ事

大方世の常に異る新しき說を起す時には、善き惡しきをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者に憎まれ誹らるゝものなり。あるはおのがもとより據り來つる說と、いたく異るを聞きては、善き惡しきを味はひ考ふるまでもなく、初よりひたぶるに棄てて、取上げざる者もあり。あるは心のうちには、げにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことに從はんことの妬くて、善しとも惡しともいはで、たゞうけぬ顏して過す類もあり。あるは妬む心の進めるは、心には善しと思ひながら、その中の瑕を驗ちに求め出でて、すべてをいひけたむと構ふる者もあり。大方古き說をば、十が中に七つ八つは惡しきをも、惡しき所をば蔽ひ匿して、僅かに二つ

三つのとるべき所のあるをとりたてて、力の限りたすけ用ひんとし、新しきは、十に八つ九つ善くても、一つ二つのわろきことをいひたてて八つ九つの善きことをも、おしけちて、力の限りは我も用ひず人にも用ひさせじとする、こは大方の學者のならひなり。

然れども又まれ〳〵には、新なる說の善きを聞きては、古きが惡しきことをさとりて、速かに改め從ふ類もなきにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながら、さてあるなどは、新なるよき說を聞きては、かくてこそはと、いみじく喜びつゝ、忽ちに從ふ類もありかし。

大方新なる說は、いかによくても、速かには用ふる人稀なるものなれど、善きは年を經ても、おのづからつひには世の人の從ふものにて、あまねく用ひらるれば、その時に至りては、初めに妬み誹りしともがらも、心には悔しく思へど、おくればせに從はむも、なほ妬く、人わろく覺えて、こゝろよからずながら、古きを守りてやむともがらも多かり。しか世の中の論定りて、皆人の從ふ世になりては、初より速かに改め從ひつる人は、賢く心さとく思はれ、古きにかゝづらひて、とかくとゞこほれる人は、心おそくいふかひなく思はるゝわざぞかし。（二の卷）

九　おのが物學びのありしやう

おのれいとき、なかりしほどより、書を讀むことをなむ萬づよりも面白く思ひて讀みける。さるは、はか〳〵しく師につきて、わざと學問すとにもあらず、何と志すこともなく、そのすぢと定めたるかたもなくて、たゞからのやまとの、くさ〳〵の書を、あるにまかせ、得るにまかせて、古き近きをもいはず、何くれと讀みけるほどに、十七

父　小津三四右衛門定利　元文五年（一七四〇）歿　年四十六

母　村田孫兵衛の女　名は勝子　明和五年（一七六八）歿　年六十四

筆蹟

生國（伊勢ノ州飯高ノ郡松坂本町ナリ姓ハ小津氏小津三右衛門定利（法名道樹）二男ナリ（實ハ長男ナリ長男ハ養子ナリ）母ハ村田孫兵衛豐商（法名堅譽元固大德）ノ娘ナリ（法名清譽光雲俗名於勝）享保十五年（庚戌）五月七日夜子ノ刻（丑ノ）

（本居清造氏藏）

八なりしほどより、歌詠ままほしく思ふ心出で來て、詠みはじめけるに、それはた師に從ひて學べるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとり詠みいづるばかりなりき。集どもも、古き近きこれかれと見て、かたの如く今の世の詠みざまなりき。

かくて二十あまりなりしほど、學問しにとて、京になむ上りける。さるは十一の歳、父に後れしにあはせて、江戸にありし、家のなりはひをさへに、失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、醫師のわざを習ひ、又そのために、世の常の儒學をもせむとてなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を、人に借りて見て、始めて契沖といひし人の說を知り、そのよに勝れたる程を

江戸にありし、家のなりはひ　江戸大傳馬町にあつた木綿問屋の業

百人一首の改觀抄　僧契沖の著した百人一首の註釋書　五卷

契沖　難波の圓珠庵の僧契沖阿闍梨　元祿十四年（一七〇一）寂　年六十二

餘材抄　古今餘材抄　古今集の註釋書　二十卷

勢語憶斷　伊勢物語の註釋書　五卷

契沖（餘形細眞筆）

も知りて、この人の著はしたるもの、餘材抄・勢語臆斷などを始め、その外もつぎ〳〵に、求め出でて見けるほどに、すべて歌學びのすぢの、善き惡しきけぢめをも、やう〳〵に辨へさとりつ。さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは、大方心にかなはず、その歌のさまも、をかしからず覺えけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞよの人なみに、こゝかしこの會などにも出でまじらひつゝ、詠みありきけり。さて人の詠むふりは、おのが心にはかなはざりけれども、おのが立てて詠むふりは、今の世のふりにもそむかねば、人は咎めずぞありける。そはさるべき理あり、別にいひてむ。

冠辭考　賀茂眞淵の著した枕詞の解釋書十卷

さて後、國に歸りたりし頃、江戸より上れりし人の、近き頃出でたりとて、冠辭考といふ物を見せたるにぞ、縣居の大人の御名をも、初めて知りける。　かくてその書初めに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬことのみにして、餘りこと遠く、怪しきやうに覺えて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、たちかへり今一たび見れば、まれ〳〵には、げにさもやとおぼゆるふしぶしも出で來ければ、又たちかへり見るに、いよ〳〵げにと覺ゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、遂に古ぶりのこゝろことばの、まことに然ることをさとりぬ。　かくて後に思ひ比ぶれば、かの契沖が萬葉の說は、なほ未だしきことのみぞ多かりける。　おのが歌學びのありしやう、大方かくの如くなりき。

さて又道の學びは、まづ初めより、神書といふすぢのもの、古き近き、これやかれやと讀みつるを、二十ばかりのほどより、わきて志ありしかど、とりたててわざと學ぶことはなかりしに、京に上りてはわざとも學ばむと、志は進みぬるを、かの契沖が歌ぶみの說になずらへて、皇國のいにしへの意を思ふに、世に神道者といふものの說くおもむきは、皆いたく違へりと、早くさとりぬれば、師と賴むべき人なかりしほどに、われいかで古のまことのむねを考へ出でむ、と思ふ志深かりしに合はせて、かの冠辭考を得て、かへすがへす讀み味はふほどに、いよ〳〵　志深くなりつゝ、この大人を慕ふ心、日にそへてせちなりしに、一年この大人、田安の殿の仰せ事を承り給ひて、この伊勢の國より、大和・山城など、こゝかしこと尋ねめぐられしことのありし折、この松阪の里にも、二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆ知らで、後に聞きて、いみじく口惜しかりしを、歸るさまにも、又一夜宿り給へるを、うかゞひ待ちて、いと〳〵　嬉しく、急ぎ宿りにまうでて、初めて見え奉りたりき。　さて遂に名簿（みゝうど）を奉りて、敎を

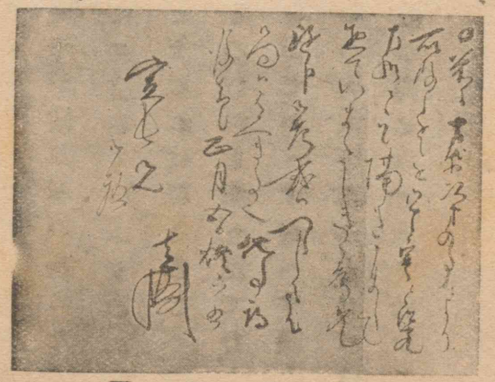
田安の殿　田安中納言德川宗武　德川吉宗の第三子　明和八年（一七七一）歿　年五十七

名簿　中古貴人に謁見し又は師家に入門する時などその證として我が名を書きて奉るもの

承ることにはなりたりきかし。（二の卷）

一〇　縣居の大人の御さとし言

宣長三十あまりなりしほど、縣居の大人の教を承りそめし頃より、古事記の註釋をものせむの志ありて、そのこと大人にも聞えけるに、さとし給へりしやうは、われももとより神の御典を說かむと思ふ志あるを、そはまづ漢意を清く離れて、古の眞の意を尋ね得ずばあるべからず。然るにその古の意を得むことは、古言を得たるうへならでは能はず、古言を得むことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さ



縣居書簡

（佐佐木信綱藏）

筆蹟

○前に萬葉次第の事により所存申遣候を御丁寧に被仰聞候左樣に候はば隔意申まじく候

惣ていまだしき御考多し

陣分御考或はつつしみ候て御問は有べき事也他事待

後音候正月五日

燈下書　眞淵

宣長兄　御座

神の御典

神々の事を記した書籍古事記日本書紀等をいふ

筆江春月望　長宣居本

る故に、われは先づもはら萬葉を明らめむとするほどに、既に年来いて、殘のよはひ今いくばくもあらざれば、神の御典を說くまでに至ること得ざるを、いましは年さかりにて、行先長ければ、今より怠ることなく、いそしみ學びなば、その志遂ぐることあるべし。但し世の中の物學ぶともがらを見るに、皆低き所を經ずして、まだきに高き所に登らむとする程に、低き所をだに得ること能はず。まして高き所は、得べきやうなければ、皆僻事のみすめり。このむねを忘れず、心にしめて、まづ低き所よりよくかためおきてこそ、高き所には登るべきわざなれ。わが未だ神の御典をえ說かざるは、もはらこの故ぞ。ゆめしなを越えて、まだきに高き所をな望みそ」と、いとねもごろになむ、戒め諭し給ひたりし。この御諭し言の、いと尊く覺えけるまゝに、いよ〳〵萬葉集に心をそめて、深く考へ繰返し問ひたゞして、古の意・詞をさとり得て見れば、まことに世の物識り

人といふものの神の御典説ける趣は、皆あらぬ漢意のみにして、さらにまことの意はえ得ぬものになむありける。（二の巻）

一一　おのれ縣居の大人の教を受けしやう

この里本居宣長の生地たる今の三重縣松阪市

宣長、縣居の大人にあひ奉りしは、この里に一夜やどり給へりし折一度のみなりき。その後はたゞ、しば〳〵書通はし聞えてぞ、物は問ひ明らめたりける。そのたび〳〵賜へりし御答の書ども、いと多くつもりにたりしを、一つも散らさで、いつき持たりけるを、せちに人の乞ひ求むるまゝに一つ二つと取らせけるほどに、今は殘り少くなむなりぬる。

さて古事記の註釋を物せむの志深き事を申せしによりて、その上つ巻をば、考へ給へる古言をもて、假字書にし給へるをも、貸し給ひ、中つ巻・下つ巻は、傍の訓を改め、所々書入などをも、手づからし給へる本をも、貸し給へりき。古事記傳に、師の説と引きたるは、多くその本にある事どもなり。そも〳〵この大人、古學の道を開き給へる御功は申すもさらなるを、かの論し言にのたまへる如く、世の限りもはら萬葉に力を盡くされしほどに、古事記・書紀にいたりては、その考未だ普く深くはゆきわたらず、くはしからぬ事どもも多し。されば道を説き給へることも、細かなることしなければ、おほむねも未ださだかにあらはれず。たゞ事のついでなどに、はしばし聊かづつのたまへるのみなり。又漢意を去れることも、なほ清くは去りあへ給はで、おのづから猶その意に落つることも、まれまれには殘れるなり。（二の巻）

一二　師の説に泥まざる事

おのれ古典を説くに、師の説とたがへること多く、師の説のわろき

事あるをば、わきまへいふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、「後によき考の出で來たらむには、必ずしも師にたがふとて、なはばかりそ。」となむ教へられし。こはいと尊き教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。

大方古を考ふること、さらに一人二人の力もて、悉く明らめ盡くすべくもあらず。又よき人の說ならむからに、多くの中には、誤もなどかなからむ。必ずわろきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、「今は古の意悉く明らかなり。これをおきては、あるべくもあらず。」と、思ひ定めたることも、思ひの外に、又人の異るよき考も出でくるわざなり。あまたの年を經るまに〳〵、さき〳〵の考のうへを、なほよく考へ窮むるからに、つぎ〳〵に詳しくなりもてゆくわざなれば、師の說なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。

善き惡しきをいはず、ひたぶるに舊きを守るは、學問の道には、いとかひなきわざなり。

又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その說に惑ひて、長くよきを知る期なし。師の說なりとして、わろきを知りながら、いはず包みかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみ尊みて、道をば愚はざるなり。宣長は道を尊み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならむ事を思ひ、古の意の明かならむことをむねと思ふが故に、わたくしに師を尊むことわりの缺けむことをばえしもかへり見ざることあるを、猶わろしと謗らむ人は謗りてよ。そはせむかたなし。われは人に謗られじ、よき人にならむとて、道を枉げ、古の意を枉げて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。

一三　わが教へ子に誡めおくやう

われに從ひて物學ばむともがらも、わが後に又よき考の出で來たらむには、必ずわが說になづみそ。わが惡しき故をいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を敎ふるは、道を明らかにせむとなれば、かにもかくにも、道を明らかにせむぞ、われを用ふるにはありける。道を思はで、徒らにわれを尊まむはわが心にあらざるぞかし。（二の卷）

たちばな

一四　漢人の親の喪に身をやつす事

もろこしの國の、世々の物識り人どもの、親の喪に、身のいみじくやつれたるを孝心深き事にして記したるがあまたある中には、まことに心の哀しさは、いとさばかりもあらざりけむを、食物をいたくへらしなどして、痩せさらぼひて、ことさらに顏容をやつして、いみじげにうはべを見せたるが多かりげに見ゆるは、例のいと〳〵うるさきわざなるを、いみじき事にほめたるも又をこなり。亡せにし親をまことに思ふ心深くば、おのが身をもさばかりやつすべきものかは。身のやつれに、病なども起りて、若しはからず亡くなりなどもしたらむには、孝ある子といふべしやは。たとひさまでには至らずとも、しかいみじくやつれたらむをば、苔の下にも親はさこそ心苦しく思はめ。いかでか嬉しとは見む。さる親の心をば思はで、たゞ世の人目をのみつくろひて、名をむさぼるは何のよき事ならむ。すべて孝行も何わざも、世にけやけきふるまひをして、いみじき事に思はするは、かの國人の習にぞありける。（三の卷）

一五　ひとむきにかたよることの論

世の物識り人の、他の説の悪しきを咎めず、一むきにかたよらず、これをもかれをも棄てぬさまに論をなすは、多くはおのが思ひとりたる趣を極げて、世の人の心にあまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人は、いかに謗るとも、わが思ふすぢを枉げて従ふべきことにはあらず。人の褒め謗りにはかゝはるまじきわざぞ。

大かた一むきにかたよりて、他説をばわろしと咎むるをば、心せばくよからぬこととし、ひとむきにはかたよらず、他説をもわろしとはいはねを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心

をめれど、必ずそれぞれしもよき事にもあらず。據るところ定まりて、そを深く信ずる心ならば必ずひとむきにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをば、とるべきにあらず。善しとして據る所に異なるは皆悪しきなり。これ善ければ、かれは必ず悪しきことわりぞかし。然るをこれも善し、又かれも悪しからずといふは、據るところ定まらず、信ずべきところを、深く信ぜざるものなり。據るところ定まりて、それを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢの悪しきことをば、おのづから咎めざること能はず。これ信ずるところを信ずるまめごころなり。人はいかに思ふらむ、われは一むきにかたよりて、他説をばわろしと咎むるも、必ずわろしとは思はずなむ。（四の巻）

一六　前後と説のかはる事

同じ人の說の、こゝとかしことゆきちがひて、等しからざるは、倩れによるべきぞと、惑はしくて、大方その人の說、すべて浮きたる心地のせらるゝ。そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。初めより終まで、說のかはれることなきは、なか〳〵にをかしからぬ方もあるぞかし。初めに定めおきつる事の、稀經て後に、又異なるよき考の出で來るは常にある事なれば、初めとかはれることあるこそよけれ。年を經て學問進みゆけば、說は必ずかはらでかなはず。又おのが初めの誤を、後に知りながらは、包みかくさで、清く改めたるも、いとよき事なり。

殊にわが古學の道は、近きほどより開け始めつることなれば、遠かに審くは考へ盡くすべきにあらず。人を經、年を經てこそ、つぎつぎに明らかにはなりゆくべきわざなれば、一人の說の中にも、前なると後なると異なることは、もとよりあらではえあらぬわざなり。

そは一人の生の限りのほどにも、つぎ〳〵明らかになりゆくなり。されば、その前のと後のとの中には、後の方をぞ、その人の定まれる說とはすべかりける。但し又自らこそ初めのをばわろしと思ひて改めつれ、又後に人の見るには、なほ初めのかたよろしくて、後のはなか〳〵にわろきものなきにあらざれば、とにかくにえらびは、見む人の心になむ。（四の卷）

一七　學者のまづ難きふしを問ふ事

物學ぶともがら、物識り人にあひて、物問ふに、ともすればまづ、古書の事にもよに難き事として、誰も解き得ぬふしをえり出で、問ふならひなり。難き事をまづ明らまめほしく思ふも、學者のなべての心なれども、しからば易き事どもは、皆よく明らめ知れるかと、試むれば、いとたやすき事どもをだに、未だえよくもわきまへず、さる者

の、さし越えてまづ難きふしを明らめむとするは、いとあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて、心も留めぬ事に、思ひの外なるひが心得の多かるものなれば、まづたやすき事を、幾度もかへさひ考へ、問ひも明らめて、よく得たらむ後にこそ、難きふしをば思ひかくべきわざなれ。（四の巻）

からあゐ

一八　手かく事

よろづよりも、手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ學問などする人は、ことに手あしくては、心劣りのせらるゝを、それ何かは苦しからむといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかず、うちあはぬ心地ぞするや。宣長いと拙なくて、常に筆とるたびに、いと口惜しう、いふかひなく覺ゆるを、人の請ふまゝにおもなく

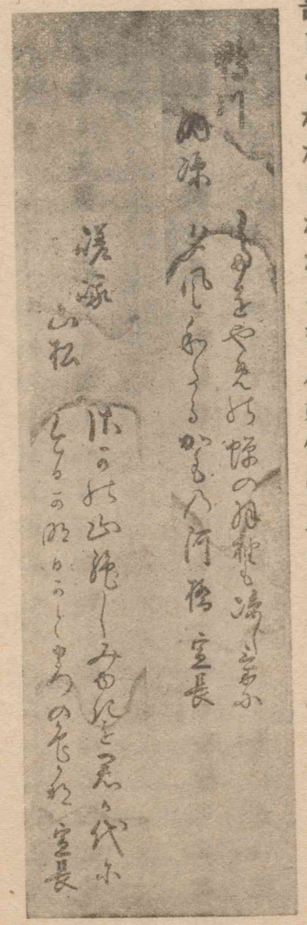
筆蹟

鵜川納涼

たをやめの蟬の羽袖も涼しげに夕風わたるかもの河橋　宣長

鞍馬山松

きがの山絶しみゆきを君が代に今日か明日かとまつの色かな　宣長



本居宣長筆

經驗一ひらなど書出でて見るにも、我ながらだに、いとかたはに見苦しうかたくななるを、人如何に見るらむと、恥づかしく胸いたくして、若かりしほどになどて手習はせざりけむと、いみじうくやしくなむ。（六の巻）

一九　花のさだめ

花は櫻。櫻は山櫻の葉あかく照りて、細きがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべきものもなく、うき世のものとも思

桐がやつ　櫻の一種　鎌倉の桐ケ谷から出初めたため　この名がある
八重・一重　桐がやつの別名

ありて世の中　殘なく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はての憂ければ（古今集）

はれず。葉青くて、花のまばらなるは、こよなくおくれたり。おほかた山櫻といふ中にも、しな〳〵のありて、こまかに見れば、一木ごとに、いさゝか變れるところありて、またく同じきはなきやうなり。また今の世に、桐がやつ、八重・一重などいふも、やうかはりていとめでたし。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何も、青やかに茂りたるこなたに咲けるは、色映えてことに見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見たるはにほひこよなくて同じ花とも覺えぬまでなむ。朝日はさらなり、夕映えも。

梅は紅梅。開けさしたるほどぞいとめでたきを、盛りになるまゝに、やう〳〵白らけゆきて、見どころなくなるこそ、いと口惜しけれ。櫻の咲ける頃までも、散ること知らで、むげに匂なく、ねびれしぼみて、殘りたるを見れば、げにありて世の中は、何事も皆かくこそと、見る事ごとに思ひ知らるるかし。白きはすべて香こそあれ、見るめは品おくれたり。おほかた梅の花は、小さき枝を物にさして近く見たるぞ、梢ながらよりはまされる。桃の花はあまた咲きつゞきたるを遠く見たるはよし、近くては鄙びたり。山吹・かきつばた・なでしこ・藤・すゝき・女郎花など、とり〳〵にめでたし。菊も、よきほどにつくろひたるこそよけれ、あまりうるはしく、したゝかにつくりなしたるは、なか〳〵に品なくなつかしからず。つゝじ、野山に多く咲きたるは目覺むる心地す。かいだうといふもの、からめきてこまやかにうるはしき花なり。

そも〳〵かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ、人は又思ふ心異るべければ、一やうに定むべきわざにはあらず。又いまやうの世の人のもてはやすめる花どもも世に多かるを、數へいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にも詠みたらず、古き物にも見えたる

ことなきは、心のなしにや、なつかしからず覺ゆかし。されどそれはた一やうなる僻心にやあらむ。（六の卷）

二〇　古き名所を尋ぬる事

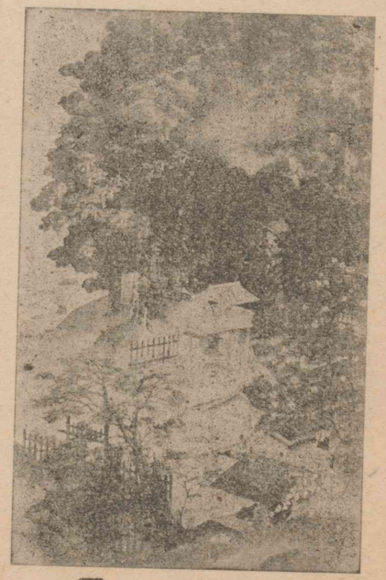
古き神の社の、今は絶えたる、又絶えざれども、定かならずなりぬるなど、いづくにも多かるは、いと悲しきわざなり。神祇官の帳に殘れるなどは、かけてもさはあるまじきわざなるを、中頃の世の亂に天の下の萬づのことも、古の掟も皆亂れに亂れ、絶え失せに絶え失せたる、萬づにつけて、いともいとも悲しきは、亂れ世のしわざなりけり。

さるを今の御世は、古にも稀なるまでよく治まりて、いともめでたく、天の下榮えに榮ゆるまゝに、萬づに古を尋ねて、絶えたるを起し興へたるを重し給ふ御世にしあれば、神の社どもは、殊に古に立ちかへりて榮ゆべき時なりけり。しかあるにつけては、絶えたるは跡を定かに尋ねまほしく、又今もありながら定かならず疑はしきをば、よく考へ尋ねて、確にそれと定めまほしきわざになむありける。

次には神の社ならぬも古に名あるところ〳〵、歌枕なども今は定かならぬが多かるは、かゝるめでたき時世にあたりて、尋ねおかまほしきわざなり。

かくて神の社にまれ、御陵にまれ、歌枕にまれ、何にまれ、遥なる古のを、中頃とめ失ひたるを、今の世にして尋ね定めむことは大方たやすからぬわざになむありける。その故をいはむには、まづこの古きところを尋ぬるわざは、たゞに古の事どもを考へたるのみにては知りがたし。いかに委しく考へたるも、審もて考へ定めたることは、そのところにいたりて見聞けば、いたく違ふこと多きものな

り。よそながらは定かならぬところも、その國にては、さすがに書きも傳へ、語りも傳へて、まがひなきこともあり。されば自らその所にいたりて見もし、そこの事よく知れる人に問ひ訊きなどもせでは、事足らはず。又ただ一度ものして見聞きたるのみにても猶足らはず。行きて見聞きて、立ちかへりてまた書どもと考へ合はせて、またまたも行きて、よく見聞きたる上ならでは定めがたかるべし。



（幽河の岡）
田村彰英撮

さて又そのところの人に逢ひて問ひ訊くにも、心得べきことくさぐさあり。古の事をあまり確かに知り顔に語るは、多くは書のかたはしをなま〳〵に考へなどしたるものの、おのがさかしらもて定め言ふが多ければ、そはいと頼みがたく、なか〳〵のものぞこなひなり。

また世に名高きところなどをば、外なるをも強ひておのが國おのが里のにせまほしがるならひにて、たゞいさゝかの據りどころめきたることをもかたく捉へて、強ひてこゝぞといひなして、證を作るたぐひなど、はたよに多きを、さる心して惑ふべからず。書などはむげに見たることなきひたぶるの賤の男の、覺えゐて語ることは、尻口あはず、しどけなく、ひがごとのみ多かれど、その中には、かへりてをかしき事のまじるわざなれば、さるたぐひをも心留めて聞くべきわざなり。されど又、昔なま〳〵の物識り人などの尋ね來たるが、ひが定めして、こゝはしか〳〵の跡ぞ。など教へおきたるを聞き居りて、里人はまことにさることと信じて、子・うまごなどにも

語り傳へたるたぐひもあむなれば、うべ〳〵しく聞ゆることも、なほひたぶるにはうけがたし。

又みづからその所のさまを行き見て定むるにも、くさ〴〵心得べきことともあり。大方所のさま神さびて、木立しげく、物ふりなどしたるを見れば、「こゝこそ」はと眼とまるものなれど、それはたうちつけには頼みがたし。大方なにならぬ所にも、古めきたる森林などは多くあるものなり。木立など二三百年をも經ぬるは、いといと物ふりて見ゆるものなれば、古く見ゆるにつきてもたやすくは定め難きわざなりかし。

村の名、山・川・浦・磯などの名に、心をつけて尋ぬべし。田どころなどのあざなといふものなどをも、よく尋ぬべし。寺の名に古きが殘れるがよくあることなり。しかはあれども又すべて名によりて誤ることもあるわざなり。

また寺々の緣起といふもの、おほかた例の法師のそらごとがちなれど、その中にまれ〳〵には採るべきこともまじれるものなれば、これはたひたぶるに棄つべきにあらず。古き跡は、中ごろ法師どもの國人をあざむきて佛どころにしなしたるが、いづれの國にも多ければ、佛どころをもその心して尋ぬべし。古き寺には古き書きものなどありて古きことの殘れる多し。むげに尋ぬべきたづきなきところも、思ひがけぬところより確かなる證の出で來るやうもあれば、いたらぬくまなく萬づに思ひめぐらして、委しく尋ぬべし。

かくて尋ね得たりと思ふ所も、なほ確かには定むべからず。よにさるべき人の定めおきつる所などは、ひが定めなるも、遂にそこに定まりて、後の惑となるわざなるかし。

そも〳〵このくだりは名所を尋ぬるわざのみにもあらず、萬づの

海にもわたることどもありぬべくなむ。（六の巻）

ふぢなみ

二一　おのれとりわきて人に傳ふべきふしなき事

おのれは道の事も歌の事も、縣居の大人の教の趣によりて、たゞ古き書どもを考へさとれるのみこそあれ、その家の傳へどととては、受け傳へたることさらになければ、家々のひめごとなどいふ限りは如何なるものにか一つだに知れることなし。されば又人にとりわきて殊に傳ふべきふしもなし。すべてよき事は、いかにもいかにも世に廣くせまほしく思へば、古の書どもを考へてさとり得たりと思ふ限りは、みな書に書きあらはして、露も殘しこめたることはなきぞかし。おのづからもおのれに從ひて、物學ばむと思はむ人あらば、たゞあらはせる書どもをよく見てありぬべし。そをはなちて外にはさらに教ふべきふしはなきぞとよ。（七の巻）

二二　唐土の老子の說まことの道に似たる所ある事

おのれ今まことの道の趣を見明らめて說きあらはせるを、漢學のともがら、かの國の老子といふものの說によれりと思ひいふ人これかれあり。そも〳〵おのが道を說く趣は、いきゝかも私のさかしらをば交へず、神典に見えたるまゝなること、あだし註釋どもと比べ見て知るべし。かくてその趣のたま〳〵かの老子といふものの書と、

老子
老聃
周の恭縣の人
老子二卷を著し
無爲自然の敎を
說いた

孔子
牧溪筆（末延道成藏）

似たるところ〳〵のあるを見て、ゆくりなくそれによりていへることは、例のかの唐土の國をおきて外に國はなく、かの國ならでは、何事も始らぬことと、ひたおもむきに思いとれる僻心よりさは思ふなめり。

老子像（東福寺藏）

古より、漢の國と通へることなく、互に聞きも及ばざりし國々にも、ほどほどにつけつゝ、あるべき限りの事は、おの〳〵本よりありける中にも、殊に皇國は、萬づの國の本、萬づの國の宗とある御國なれば、萬づの國々にわたりて正しきまことの道は、たゞ皇國にこそ傳はりたれ。他國には傳はれることなければ、この道を知ること能はず。然るに唐土の國に、かの老子といひしは、すぐれて賢く、たゞり深き人にこそありけぬ。世のこちたくさかしだちたる敎は、うはべこそよろしきに似たれ、まことにはいとよろしからず。なか〳〵の物害ひとなることをさとりて、まことの道はかくこそあるべきものなれと、はし〳〵自ら考へ出でたることの中に、考へあて、たま〳〵このまことの道に似たるふし合へることもあるなりけり。さるはまことの道は、もとより人のさかしらを加へたることなく、皇神の定めおき給へるまゝなる道にしあれば、その趣を說かむには、かれがさかしらを憎める說は、自ら似たるところ合へるところあるべきことわりなり。

聖徳太子像（東福寺藏）

儒 儒教 孔子の說を奉じて四書五經を經典とする

佛 佛教 釋迦牟尼の說いた宗教轉迷開悟して涅槃に入るを說く

しかはあれども、かれがいへるは、たゞおのが智慮もて、考へ出でたる限りにこそあれ、皇國に生まれて正しくこの道を聞けるにあらざれば、その主とある本の意は、知ること能はず。いたく違ひてさらに似もつかぬことなるを、かの漢學のともがら、從へるところをば知らで、たま〳〵かたはし似たることのあるを捉へてそれによれりとしもいひなすは、いとをこなりかし。

大方萬づの事、自らこれにもかれにも通ひて似たることは必ず交るものにて、この道も、儒の趣と通へるところも交り、佛の道とも似たることは交れゝば、自らかの老子とも、かたはし似たるところ通へるところは、などか交らではあらむ。（七の卷）

二三　田舍に古の雅言の殘れる事

すべて田舍には、古の言の殘れること多し。殊に遠き國人のいふ言の中には面白きことどもぞまじれる。おのれ年頃心をつけて遠き國人のとぶらひ來るには、必ずその國の詞を問ひ訊きもし、その人のいふ言をも心とゞめて聞きもするを、なほ國々の詞どもをあまねく聞き集めなばいかに面白きこと多からむ。

近き頃、肥後の國人の來るがいふことを聞けば、世に「見える」、「聞える」などいふたぐひを、「見ゆる」、「聞ゆる」などぞいふなる。「こは今の世には絕えて聞えぬ雅びたることばづかひなるを、その國にてはなべてかくいふにや」と問ひければ、「ひたぶるの駿山がつは皆『見ゆる』、『聞ゆる』、『さゆる』、『たゆる』」などやうにいふを、すこし詞をもつくろふほどの者は、多くは『見える』、『聞える』といふやうにいふなり」とぞ語りける。そはなか〳〵今の世の俗しきいひざまなるを、なべて國國の人のいふからそをよきことと心得たるなむめり。いづれの國にても駿山がつのいふ言は、よこなまりながらも多く昔の言を

いひ傳へたるを、人しげくにぎはしき里などは、他國人も入りまじり、都の人なども、ことにふれて來通ひなどするほどに、自らこゝかしこの詞を聞き習ひては、おのれも言撰りして、なまさかしき今やうに移り易くて、昔ざまに遠く、なか〳〵にいやしくなむなりもて行くめる。まことや同じ肥後の國の又の人のいへる、かの國にて、ひきがへるといふものを、たんがくといふなるは、古のたにぐくのよこなまりなるべく覺ゆ。と語りしは、まことにしかなるべし。このたぐひのこと、國々になほ聞えること多かるを、今はふと思ひ出でたることをいふなり。なほ思ひ出でむまゝに、又もいふべし。

（七の卷）

二四　田舍に古のわざ殘れる事

調のみにもあらず、萬づのしわざにも、片田舍には、古ざまのみやびたることの殘れるたぐひ多し。さるを例のなまさかしき心ある者の立ちまじりては、かへりてをこがましくおぼえて改むるから、いづこにもやう〳〵に古き事の失せ行くは、いと口惜しきわざなり。葬禮・婚禮など、ことに田舍には古く面白きこと多し。すべてかゝるたぐひのことどもをも、國々のやうを、海づら山がくれの里里まであまねく尋ね、聞き蒐めて、物にも記しおかまほしきわざなり。葬・祭などのわざ、後の世の物識り人の考へ定めたるは、なかなかに漢意のさかしらのみ多くまじりてふさはしからず、うるさしかし。（八の卷）

二五　今の人の歌文僻事多き事

近き世の人は、歌も文も大方はよろしと見ゆるにも、なほ僻事の多

きぞかし。されどその違へるふしを、見知れる人はた世になければ、たゞかいなでに、こゝかしこ艶なることばを使ひ、よしめきて詠みなし、書散らしたるをば、まことによしと見て、人のもてはやしほめたつれば、心をやりてしたりがほすめる、いとかたはらいたくをこがましくさへぞ思はるゝ。

さるにつけては、かくいふおのが物することも、なほいかに僻事とあらむと、物よく見知れらむ人の心ぞ恥づかしかりける。人の僻事の、よく見えわかるゝにつけては、われはよくわきまへたれば僻事はせずと思ひ誇れど、古のことの意を悟り知るすぢは、限りなきわざにしあれば、この外あらじとはいとなむ定めがたきわざなりける。（八の巻）

二六　歌も文もよくとゝのふは難き事

近き世の人の歌ども文どもを見あつむるに、一ふしをかしと目とまることはほど〳〵にあまたあめれど、それはたいかにぞや覺ゆるところはまじりて、大方瑕なくとゝのひたるはをさ〳〵見えず。これを思へば後の世にして古をまねぶことは、いと〳〵かたきわざになむありける。古の賢き人々のだに、これはしも露の瑕なしと覺ゆるは、多かる中にも少くなんあれば、まして今の人のは、いさかなる瑕をさへにいひたてむは、あながちなるにやあらむ。されど同じくは、人のいさゝかも難ずべきふしまぜぬさまにこそはあらまほしけれ。よきほどにて心をやるをば、唐土の古の人もよからぬことにいひおきけるをや。（八の巻）

山菅

二七　物學びのこゝろばへ

昔は、皇國の學とてことにすることはなくて、たゞ漢學をのみしけるほどに、世々を經るまゝに、古の事は、やう〳〵に疎くのみなりゆき、漢國の事は、やう〳〵に親しくなりもてきつゝ、遂にその意はもはらからざまにうつりはてて、上つ代の事は、物の意はさらにもいはず、言葉だに、聞きしらぬ異國のさへづりを聞くかごと、ものうとくぞなりにける。

かくて後にいたりて皇國の學をもはらとすることも始りつれども、しか漢意の、久しくしみつきたる人心にしあれば、たゞ名のみこそ皇國の學にはありけれ、言ひと言ひ、思ひと思ふことは、猶みな漢にぞありけるを、自らも、さは覺えざるなめり。

されば近き世、學の道開けて、萬づさかしくなりぬるにつけても、なかなかにその漢意のみ深くさかりにはなりて、古の意は、いよ〳〵はるかになむなりにけるを、この近き頃になりてぞ、そこに心づきぬる人の出で來そめて、世はみな漢なることをさとりて、人もわれも、古の意をたづぬる道の明り初めぬる。しかすがに、神直毘・大直毘の神のまし〳〵ける世は、なほゆくさきいとたのもしくなむ。

（十〇卷）

安藤爲章
國學者
丹波の人
水戸義公に仕ふ
享保元年（一三七六）
歿
年五十八

顯昭
平安末期の歌僧
歌學者

仙覺
鎌倉時代の學僧
萬葉集の訓み方を研究し註釋を著した

きねかづら

二八　後の世は恥づかしきものなる事

安藤爲章が千年山集といふものに、契沖の萬葉の註釋をほめて、「かの顯昭・仙覺がともがらを、この大德になぞらへば、あたかも駑駘に等しといふべし」といへる、まことにさることなりかし。そのかみ顯昭などの說に比べては、かの契沖の釋は、加ふべきふしなく事盡きたりとぞ、誰も覺えけむを、今又わが縣居の大人に比べてみれば、契沖のともがらも又、駑駘に等しとぞいふべかりける。何事もつ

きつぎに後の世はいと恥づかしきものにこそありけれ。（十一の巻）

二九　足ることを知るといふ事

足ることを知るといふは、もろこしの人の常にいみじきわざにすめることなるを、これまことにいとよきことにて、しか思ひとらば、ほど〳〵につけて誰も〳〵心はいと安かりぬべきわざにぞありける。しかはあれども、高き短きほど〳〵に望み願ふことの盡きせぬぞ世の人の眞情にて、今は足りぬと覺ゆる世はなきものなるを、世には足ること知れるさまにいひて、さる顏する人の多かるは、例のからやうのつくりごとにこそはあれ。まことにきよくしか思ひとれる人は、千萬づの中にもありがたかるべきわざにこそ。（十一の巻）

三〇　物學びはその道をよく擇びて入り初むべき事

物まなびに志したらむには、まづ師をよく擇びて、その立てたるやう敎のさまをよく考へて、從ひそむべきわざなり。智鈍き人は、さらにもいはず、もとより智とき人といへども、大方初めに從ひそめるかたに自ら心はひかるゝわざにて、その道のすぢわろけれどわろきことをえ悟らず、又後には悟りながらも、年頃の習は、さすがに棄てがたきわざなるに、我とかいふ禍神さへ立ちそひて、とにかくにしひごとして、なほそのすぢをたすけむとするほどに、終によき事はえものせで、世の限り僻事のみして、身を終ふるたぐひなど世に多し。かゝるたぐひの人は、つとめて深く學べば、學ぶまに〳〵、いよ〳〵わろきことのみさかりになりて、おのれ惑へるのみなら

ず、世の人をさへに惑はすことぞかし。かへすがへす初めより、師をよく擇ぶべきわざになむ。（十二の巻）

おもひ草

田中道麻呂　國學者　美濃の人晩年は名古屋に住んだ　天明四年（一七八四）歿　年五十五

三一　思ひ草

末ひろくしげりけるかなおもひぐさ尾花がもとはひともとにして

そも〳〵この思ひ草といふ草はいかなる草にか、さだかならぬを、一年屋張の名古屋の田中道麻呂が許より文のたよりに「今の世にも、思ひ草といひて薄の中に生ふる、小き草なむあるを、高さ三四寸、あるは五六寸ばかりにて、秋の末に花さくを、その色紫の黒みたるにて、うち見たるは菫の花に似て、菫のごと色のにほひはなし。花さく頃は、葉はなし。この草薄の中ならでは、ほかには生へず。花のはしつかたなる所の中に、黒大豆ばかりの大きさなる實のあるを取り蒔けば、よく生ふるなり。されども、それも薄の下ならでは蒔けども植うれども、生ふることなし。古の思ひ草もこれにやあらむ。されど薄の中にのみ生ふるから、近き世に事好むもののおしてそれと名づけたるにもあらむか」といひて、その草の圖をも書きて見せにおこせたるその圖は、かくぞありける。その後に又或時、花の咲きたる頃、一もとほりて、薄のきりくひごめに、竹の筒の中に植ゑて、たゞにその草をも、見せにおこせたるを、移し植ゑて見けるに、しばしは生へつきたるさまにてありしを、ほどなく冬枯にける。又の年の春、萌えや出づると、待ちけるに、遂に枯れて、薄ながらに芽も出でずなりにきかし。さるは後にたづね見れば、このわたりの野山なる薄の中にもある草にぞありける。これ古の思ひ草ならむことはしも

思ひ草

げにいとおぼつかなくなむ。（十五の巻）

三二　靜かなる山林を住みよしといふ事

世々の物識り人、又今の世に學問する人なども、みな住家は、里遠く靜かなる山林を、住みよく好ましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにかさらにさはおぼえず。たゞ人げ繁くにぎはしきところの好ましくて、さる世ばなれたる處などは寂しくて心もしをるゝやうにぞおぼゆる。さるはまれ〳〵にものして、一夜旅寢したるなどこそは、珍らかなるかたに、をかしくもおぼゆれ、さる處に常に住まほしくはさらに覺えずなむ。

人の心はさま〴〵なれば人疎く靜かならむ處を住みよくおぼえむもさることにて、まことにさ思はむ人も世には多かりぬべけれど、又例のつくりごとの筆ぶりの人まねにさいひなして、なべての世の人の心と異るさまにもてなすたぐひも、中にはありぬべくや。かく疑はるゝものおのが俗情のならひにこそ。（十三の巻）

つら〳〵梅

三三　一言一行によりて人の善き惡しきをさだむる事

人のたゞ一言、たゞ一行によりて、その人のすべての善き惡しきを定めいふは、漢書の常なれども、これいとあたらぬことなり。すべて善き人といへども、まれには理にかなはぬしわざも交らざるにあらず。惡しき人といへども、善きしわざも交じるものにて、生けるかぎりのしわざ、こと〳〵に善き惡しき一かたに定まれる人は、をさ〳〵なきものなるを、いかでかはたゞ一言一行によりて定むべき。（十四の巻）

橘

三四　古より後世のまされる事

古よりも後世のまされること、萬づの物にも事にも多し。その一つをいはむに、古の橘をならびなきものにしてめでつるを、近き世には、蜜柑といふものありてこの蜜柑にくらぶれば橘は數にもあらずけおされたり。その外、かうじ・ゆ・くねんぼ・だい〳〵などのたぐひ多き中に、蜜柑ぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似てこよなくまされるものなり。この一つにて推量るべし。或は古にはなくて今はあるものも多く、古はわろくて今のはよきたぐひ多し。これをもて思へば、今より後も又如何にあらむ、今に勝れるもの多く出で來べし。今の心にて思へば、古は萬づに事足らず、あかぬ事多かりけむ。されどその世には、さは覺えずやありけむ。今より後また物の多くよきが出で來む世には、今をもしか思ふべけれど、今の人、事たらずとは覺えぬが如し。（十四の卷）

三五　道

神の道は世にすぐれたるまことの道なり。みな人知らではかなはぬ皇國の道なるに、わづかに糸筋ばかり世に殘りてたゞまことならぬ他の國の道々のみはびこりにはびこれるは、いかなることにか、まがつひの神の御心は、術なきものなりけり。（十四の卷）

玉勝間のおの〳〵の巻に題して　　本居宣長

初若菜

かたみとは磯れ野澤のみづぐきのあさくみじかきわかななりとも

わすれ草

ふみみつる勝も夏野のわすれぐさ老いてはいとどしげりそひつつ

萩の下葉

人は來ず萩の下たばもかつちりてあらしはさむし秋のやまゝと

山菅

はてもなしいふべきことはいへどいへどなほ山菅の亂れあひつつ

つらつら椿

世の中をつらつらつばきつら〳〵に思へばかもふことをあるかも

花月草紙

解題

作者　松平定信、樂翁と號した。田安中納言宗武の第七子。陸奥（福島縣）白河の城主松平定邦の養嗣子となる。天明三年（一七八三）家督を受けて越中守を拜し、天明七年老中となり、侍從に任ぜられた。官に在るや善く將軍家齊を輔佐し、弊政を革め、紀綱を張り、所謂寛政の治を成し、德川三百年の政治上に異彩を放つた。また學を好み、和歌をよくし、畫に巧であつた。文化二年（一八〇五）致仕して樂翁と稱し、文政十二年（一八二九）卒す。年七十二。

成立　寛政八年（一七九六）以後享和三年（一八〇三）以前に成立したものである。なほ原刊本は著者の自筆原稿を版下として刻したもので、その存生中に出來たやうであるが、刊行の歳月は明かでない。六卷。

內容　樂翁の老後の隨筆であつて、社會の諸事相、人生の明暗、天地間の山水花月を雅文で書き記したものである。文中に奇警あり、皮肉あり、滑稽あり。見識の高さと文藻の豐さが窺はれる。文章は流麗であるが、その道の人でないので語法上の誤謬があるのが疵である。

影響　德川時代の隨筆として此の花月草紙と殆ど時を同じくして出版せられたものに彼の玉勝間がある。玉勝間が國文學者の復古思想の上に立脚して研究・考證・感想等を述べたのに對して、花月草紙は政治家が儒教主義の倫理觀の上に立脚して作者の理想を述べたものである。そしてこの兩者は擬古文といふ一種の型の制約を受けつゝも互に影響し合つて、平安時代・鎌倉時代の隨筆が類型的なるに比較して、德川時代の隨筆なるものをして一層個性的色彩を濃厚ならしめた點を特に注目すべきである。

白波　白波を盜賊の意に這はしてゐる

一　はしがき

樂翁

久しう浦わの里に住める翁ありけり。布刈り鹽燒く暇には、えらなき藻屑かい集めて、鹽屋の窓の戸にかい挾み置きたるを、世のえせ者の取りて歸りにけり。またの年行きて見れば、懲りずまにかい挾み置きたり。かく白波のよる〳〵ごとに數も積みしかば、遂にこの卷々となりぬとぞ。

この藻屑の端つ方に、月と花とのことながら〳〵しく書いたれば、それをもて名だてしは、かのえせ者のせしことなりとぞ。蜑のさへづり、とこそいはまほしけれ。と星の子はいひし。（一〇卷）

無きと聞けば云々

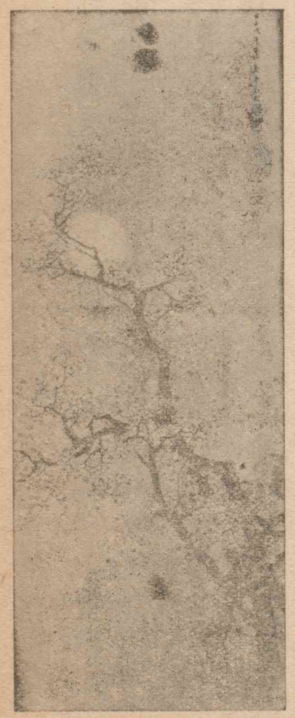
「この部分は無しと聞けば有りといはまましく、惡しといふをば善しと事かへて……」といふのが語法上正しい言ひ方であるかういふ處が他にもある

二 花

無きと聞けば有りといはまほしく、惡しきといふをば善きと事かへていはむこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は、我が國のものなるを、唐國にもありとて、さま〳〵例など引きつくれど、櫻畫いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふ詩もなければ、無しとこそいふべけれ。いでや櫻といはでしも、花とだにいへば、異木には紛れぬものを、ほの〳〵と明け行く山際、雲か雪かとばかり咲きみちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひも朧に見えて、こゝにのみ暮れ殘す景色などいふは淺かりけり。まいて夢ののびやかなれば、近劣りするなどいふは、彼のことかへて才負ふ心にいふことなりかし。風に散りかふも雨に濡るゝも、遠山に見るも、軒端に對かふも、曙も夕暮も、露のひるまも、目かるゝ時しなきを、ことにわが國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかたちもゆたけく、匂さへもこちたからぬも、あやしきまでにこそ覺ゆるものなれ。然るをいづこにもありといふはさらなり、曙・夕暮などと面白からむやうに言葉添ふるは、いまだ深くそめし心にはあらざりけり。すべて言葉もていひ盡くさむと思ふは、いと淺き心かな。（一の卷）

三 月

月のさしのぼる頃、曙の空覺えて横雲のたなびきたるに、やゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいさようて、姿も見えず、辛うじてさしのぼりけ



朧月櫻花
（今尾景年筆）

り。梢の憂さも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近寄るほどあやにくに、月の方より雲の中へかき入るやうに見ゆ。こは如何にせむと暫しうちまもるに、雲の端つ方明う見ゆるにぞ、出で離れたらば、はやかゝらむ隈はあらじと思ふに、いつのまにか、また白雲の月待ち顔にたなびきて見ゆれば、胸打ちつぶれてうち見るに、初の雲より出でたる光いとあたらしう見えて、殊にさやけし。かの待ち居れる雲に對かへば、又馳入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこに、それとおもかげ見ゆるにぞ、ひたすらにうらみはてで見居れる中に、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくと對かひ居たれば、心の果なきやうにこそ覺えしか。（一の卷）

久方の空

「久方の空にまかせて、わがさゝやかなる才を用ひざれ」とはいへど、空にまかすに深き心あるべし。星の光見ても、はや沖は荒き風吹出でつ、このあたりへは、明日の晝つ方吹き來るべしといふ事も知れれば、心して乘るを空にまかすとは言はめ。沖の風吹くも吹かぬも問はずして、今こゝの波平かなれば、はや漕出でて行くを、空にまかすとはいはじ。もの食ふものにてもあれ、すべて身を養ふ道を盡くし、そのほどを愼みて後、生死を空に任すべきを、養のことは心とせずたゞ己が欲りすることにのみ隨ひて、生死を空に任すといふこともありぬべし。（一の卷）

五學問

「かの人は、雪螢聚めし窓に年をつみて、文見る道に心を盡くし侍るなり。されば世の中の事には、いと疎く侍り」といへば、「さるこそま

五つの常
仁義禮智信（五常ノ道ナリ（漢書））
五つの倫
父子親有リ
君臣義有リ
夫婦別有リ
長幼序有リ
朋友信有リ
（孟子）

ことの道學ぶ人なりけれ」と、褒めものする者ありとや。もとより道學ぶものは、五つの常、五つの倫よりして、人を治め己を修むる道學ぶより外のことはなし。されば世の事にさとく、今のあたりのみかは、千年の前の世のこと、見ぬ唐の昔今のさまより、盛り衰ふるきざし、人の心のうへより仕ふる道のくさ〳〵に至るまでも、明かなるこそ道學ぶ人とはいふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道學ぶ人とはいふべからむ。（一の巻）

六　筆のいのち

「この筆はいとわろし、三度四度ものすれば、皆かぶろのやうになりぬ」とて、とみに物書く折は墨もすらで、硯の海を掻いまはし、書きはつれば掖げおくにぞ、硯や祕閣のはざまなどに横たはりて、いつか光も釣針のやうになりて乾きに乾きたるを、また惜しげなく、縦ざ

まに平瀉のあたりにて書出づるばかりに掻いまはし、或は齒もて噛みくだき、又は墨もて筆の先を押しひしぎて書きつ。かくてはいかで命の長かるべき。よき筆をば先づ笠取るもしづめてし、物書いたる後にても洗ひものし、紙に押しあて、又はすかし見て、一筋も亂さじとして置くめり。いと〻命の長かるべき理なり。はやく損じなむと思ふをば、いとあら〳〵しくなして「これ見給へ、三度四度にはやかくなりし」といふもをかし。（一の巻）

樂翁筆跡

七　風流好むもの

風流好む者、今の世にいと多かれど、いづれを眞の風流とはいひも定めむ。たゞ月を見、花を見るとても、いかでいはむ。歌詠み漢詩作るとて、いかでいはむ。

今の風流といふは、まづわが名を衒ひてむと思ふより、をかしと思はでも、古人の好みしものは、物まねびして、それもて名得むとするもあるべし。歌詠むとても、よその心より詠出で、よその口まねびして、人に衒ひてほまれ得むことをのみ思へば、心にもあらぬ事を詠みなし、或は奈良の都の古言を集めて作りなせど、詠みなす心の中は、今の世の末が末なるふりを改めず。かくて古に復せりと思ふもあるべし。または世に仕ふる道をもよそにして、人に高ぶる風流もありなむ。

たゞやむごとなき人は、花を見、月を見るとても、いかで心のまゝにすべき。われ一人面白きとて、夜更くるまで月花の宴に耽らば、大

奈良の都の古言
萬葉集に使つてゐる古語

大炊殿
大飯殿の義か
豪斷

炊殿のあたりはさらなり、從者なんどを初めとして、睡ることもえせじ。君は遲く寐ねば遲くも起き出でなむ、末つ方の者は猶早く起き出でぬべしと思ひやりて、名殘惜しともうち捨て、閨に入るをこそ、そのほど得しみやびとは言ふべけれ。殊に月花の宴とても、それをばよそになして、戯れたる事にのみ夜を明すなんどは、いふにも及ばずなむ。

いでや武夫ならば、かの槊横たへて漢詩よみ、弓に矢はげて歌詠みしなんどは、まことのみやびなるべし。皆わがすべき事をもせず、わが程を知らで、いやしきものは高きまねびし、高きものははかなき住ひなんどのまねびし、漢詩つくるものは、唐國の物商ふ賤にもあれ、うるま・百濟の人も、唐國に近しとてや、その書いたるものなど殊に尊ぶ類もあり。歌詠むものは雲の上人ならば、いつも名だたる人のやうに覺えて、拙き歌をも寫しものして、もてあそぶもある

槊横たへて漢詩よみ
魏の曹操赤壁に戰ひ月明の夜槊を横たへて「月明カニ星稀ニ烏鵲南ニ飛ブ」の詩を作つた（舊唐書）

弓に矢はげて歌詠みし
源義家と安倍貞任との故事
義家弓に矢を番へて「衣のたてはほころびにけり」と詠むや貞任は「年をへし糸の亂れの苦しさに」と詠んだといふ（古今著聞集）

うるま
琉球の古名

べし。又は古き物を集むとて、今の用ある物に代へても、用なき物を求むるもありぬべし。みやびは花の薫なり。花と實とありて足りなむ。されどこの薫ありてこそ梅は桃に勝りぬれ。（一の卷）

八　蝦夷の人

蝦夷の人に飯を與へしかば、いと喜びながら、そこら食ひこぼしてけり。「やよ米は玉の緒つなぐものなるを、などかくおろそかにするや」と問へば、「われらは米食ひて命を全うするにはあらず、鮭といふ魚食ひて生くるを」といふ。「さらば鮭の魚にて命をのばゆるならば、それをば尊ぶべからむ。今その足に履きたるものは、鮭の皮ならずや」と言へば、しばし頭かたぶけて、「君の足につけ給ふ草鞋とやらむは、かの米の出で來る草にはあらずや」と言ひしにぞ、「侮るまじきことよ」と、人の言ひしとぞ。わが國の人は、よその事を知らねば、蝦夷人のなりかたちわが國の人と違へば、いと愚にて何知らぬものよと思ふ類ぞ多き。それより漢國にてもあれ、蝦夷の人にてもあれ、たゞ姿の見なれぬを見ては、腹抱へて、言葉のわき難きを聞きては、又笑ふ。心せばく、よそ見ぬ故なるべしといひぬ。（一の卷）

九　はや鍋

年の暮に、淺草寺のあたりに市といふ事ありて、まことに人多く出づるなり。

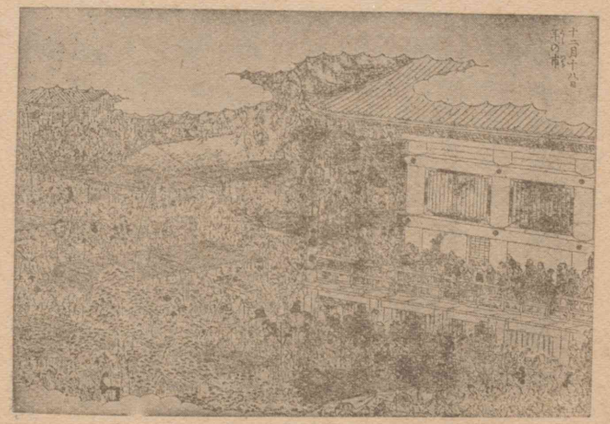
或人薩摩の國より鮑の貝多く買求めてけり。その貝の穴をふたぎ、木もて蓋をつくりて、その市にて賣らむと謀りけるが、折節障る事あれば、人に頼みて、「壹つかたには來るべし、それまでに賣りてたべ」といふにぞ、もて出でて賣るに、顧みる人もなし。「されば、よ、かうやうの、ものこの市にて賣りしためしなきを、益なき事に時費すも

淺草寺　淺草觀音堂のある寺　天台宗

鮑の貝

のかな」と思ひつゝ、いかに賣れども、買ふものなければ、往來の人の袖控へて、「これめさせ給へ」などといふに、引放ちて行くめり。

晝過ぐる頃、かの人來りて、「いかに」と問へば、かくといふ。「何といひて賣りし」といへば、「別に何とかいはむ、貝やきの貝めさせ給へとて賣りし」と答ふ。かれほゝゑみて、「わが賣るを見給へや」とて、いと聲高に、「はや鍋、はや鍋」といへば、過ぎ行くものは立歸りて買求め、そこら行く人も聲をとめて買ひぬ。見るがうちに多くの貝を皆賣りてけり。



四季草の年中行事
（江戸名所圖會）

さはら　檜　松杉科の木材

この市は人多く出づれば、殊に喧しくて、靜かに心とむるものもなければ、手桶賣るものは「さはら、さはら」といふ。「檜の木もて作りし手桶よ」とはいふ暇もなく、聞く暇もなしとかや。物の勢といふものもまた理の外なるものなりけり。（一の卷）

一〇　四季の雨

「月の夜半こそ思ふくまもなく、心の底も澄みわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹きかふは、また優りぬるやうに覺ゆる」といへば、「雨ぞいと優りぬるを」といふ。「いかに」と問へば、「いでや旱天の雨はさらなり、草木の花咲きみのるも、皆この惠にこそあんなれ。またその愛情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春かなとぞ思ふめる。師走の晦日のどやかに降りたるも、春待ち顔

にていとをかし。

すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞みわたりて、いとこまやかに降れるが、衣濕せども降るとは見えず、軒の玉水も間遠に音して、住み捨てし蜘蛛のいに玉ぬく、けしき、庭の面の枯生の底に綠やや添ひ行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、ともにいと長閑なれ。燈火かゝげても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄みわたりぬるものぞかし。その外梅が香のしめり、夜深く匂ひわたるも、花にうしとかこちぬるも、あはれはありけり。春も老い行く頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。

蛙（葛飾北斎畫）

ほとゝぎすの云々

いかにせん來ぬ夜あまたの時鳥待たじと思へば村雨の空（新古今集）

ほとゝぎすの初音いかにと思ふ頃、村雨のはら〳〵降出でたるも、五月雨の幾日も降暮して、書の卷々繰返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも、遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲の漂り出づる勢ありて、風ひとしきり吹落ちたるに、柳蓮葉なんどの、葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の、間遠に落ちたるが、後には頻りに降來て、物音も聞えず、土の匂ひ來るもいと心地よし。軒端は玉の簾垂懸けたらむやうに、玉水の絶間もなく落ちたるに、庭は一つみづうみとなりて、あるは灑落し、または水走らせたるに、人々しばしものいはでうちまもり居たるもをかし。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて、餌拾ふさまなり。はじめ雲の立ち出でし方は、はや空のひとしほ綠に見えて、虹なんど見ゆるに、木々の綠の庭潦（ニハタヅミ）に、かげ見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷の音に驚きて

枕近く鳴き
六月莎雞羽ヲ振フ七月野ニ在リ八月宇ニ在リ九月戶ニ在リ十月蟋蟀我ガ牀下ニ入ル（詩經）

這出でたるが、「今日のは幼かりし時のごと、よく晴れにけり。今時のはかく晴るゝこと稀なり」なんど、はや繰言いふもあり。「かれはかくあわてし」などいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、「今日は蚊も少なかるべし。雷の音もいとかすかなり。この頃の暑さも忘れぬ」とて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、もの待ち顔に空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。

秋來る頃の雨は、昨日にかはりて何となう淋し。萩の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身に沁む心地ぞする。常に聞きなれし筧の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいてやゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕近く鳴き寄るもあはれなり。「この雨に木々も染めなむ」と思へば、草なども生ひ出でなむ、栗もはや落つべし」などと、

童のものさびしげに、篝火に向かひつゝ書出づるもげにさまんゝなり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、鐘つく人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染め添ふも、白菊のうつり行きてひとさかり見するも、尾花の露重げにうち萎れたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりも、つきづきし。朝顏の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲出でたるが、晝過ぐるまでも萎み遲れたるまたあはれなり。野分の風は、おどろおどろしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれを添ふるは、秋のならひなるべし。時雨のざと音し

紅葉
（横山大觀畫）

て、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、あはれ深きものには侍らずや」といへば、「かうやうに言ひならべては、げにもといふべからむが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨は一昨日より降出でしをと、思ふ心はかはらじ」と、心の中に思ひて、聞き居しもまたをかしかりけり。（二の卷）

一一　詞の外なる心

「學問は人の道まねぶことなり。漢詩つくり、文つくるはせんなし」と、よく人のいふことなれど、みやびは花の薫の如く、物の潤の如し。まいてかの國の文字を覺えて、書讀むとも、文字のつかひざまにて、深さ淺さの違ひめあるものにて、かの國の人のごとは知り得がたかんめれど、さすがに漢詩つくり、文つくれば、自ら言葉の外なる心をも得るものとかや聞きぬ。されば、すべには如かじかし。など

てこれを藝ずべき。（二の卷）

一二　那須餘一

「那須の餘一は、弓の上手にてもあるべけれど、陽を海に乘入れて、風に動きて定まらぬ扇を射むといふは、いと難きことなり。射損じなば、死ぬべしといふも、さもあるべき心なるべし。たゞ扇にのみ心あり

那須餘一（小林國雄畫）

て放ちたりとて、必ず中るべしともいひ難かるべし。さるに心にたちかへりて、神に祈念したるにて、心は内に留まりて外へ馳せず。遂に思ふ矢つぼ遠はざりしは、わが心の誠へ反りて、神明良能の妙

那須餘一
名は宗高通稱餘一。下野國那須の人。屋島の磯に源氏の旗印の中から射落されて平家方より感歎のあまり敵味方の区別なく敵に立てて美て來たのを見て彼に射落して源軍の喝采を博した。

の出でしなり」といひしが、さあらむこともありぬべし。（二の巻）

一三　理のまこと

理なきが理のまことなり。理のごと行はるゝものならば、何の難きこともあらじを、さも知らで、人とあらそひ、政を譏りなどしてたかぶる者は、理のまことを知らぬとやいふらむ。（二の巻）

一四　花時の雨

花の咲く頃、雨の降出でたるに、風さへ添ひぬれば必ず花の時雨風の憂さ添ふならひにて、人の世の別れ離るゝ理見する事にこそ。さりとてはつらき雨かな、憂き風かな」といふを聞きて、「雨降るとて五月雨のやうにはあらず。烈しきとて夕立のやうにはあらず。風添ふことも、秋の末つ方の野分、または颱のやうにはあらぬものを、花を惜しめば、ことさらに雨も風も世になきやうに思ひ給ふか」といひき。（三の巻）

一五　黄金の袋

賤しき者なりけるが、常食ふべき米をも食はず、販ぎて黄金にかへて命にもかへじと、袋に入れて持ち居たるに、秋の末つ方、にはかに水出でにければ、かの袋を首にかけて高き處へ行かむとするに、はや水嵩高くて行くべきやうなければ、せんかたなく、木に攀ぢ登りてけるが、殊に餓に臨みけり。さるに米いさゝか苞にし負うて、水泳ぐものを見て、かの袋の黄金を見せて、「これを皆まゐらせむ。」その負ふところの米いさゝか分けてたまはれ」といへば、いと怒りて、「にくき男の言ひざまかな、かゝる時黄金持ちて何にかはせむ」といひすてて、泳ぎ行きしとなり。（三の巻）

一六　餘地

「道路は足底の廣さだにあらば、歩むべし」といふは、例の理のみなり。いかで歩むべからむ。梁の上を歩まば落ちぬべし。こはかの陳氏のいひたる餘地なきなり。あまりに事に甚だしく、物にせちなれば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物に對して餘地なきなりと聞きぬ。（三の卷）

陳氏の云々　人ノ足ノ履ム所ハ數寸ニ過ギズ然ルニ咫尺ノ途必ズ崖岸ニ顛蹶レ拱抱ノ梁毎ニ川谷ニ沈溺スルハ何ゾヤ其ノ餘地無キガ爲ノ故ナリ（顧氏家訓）

一七　禪意

禪意を得たりといふ者あり、いかにして得給ひし」と問へば、「わがこの身は天地のものにて、われといふものはなし。われなければ敵もなし。これをかの浩然の氣ともいひ置き給ひしなり」と、高く心得ていひてげり。「いかにしてその所を得給ひしか」といへば「思ひ

浩然の氣　吾レ善ク吾ガ浩然ノ氣ヲ養フ（孟子）

思ひて遂に得しなり」といふ。聞きたる人いと笑ひて、「さまざまひじりも說きおかれけれど、かゝるところ得てし人は、今の世にあるべしとも思ほえぬばかり稀なるを、いまだその事々も知り給はで、いかで得給ふべき」といへば、腹立ちて、「知らざらむ人は如何にいふとも、私こそ得しものを、などて君はしかいふ、わが得ざる事を知り給はば、いひのべ給へ」と聲ふるはしていふにぞ、「それ見給へ。怒をも未だ捨て得ずして、この身を捨てしとのたまふや。ことに色と酒とに耽り給ふと聞きぬ。それだに克ち給はで、わが身に克ち給はむとや。よし克ち得しとても、忘るてふ事はいと難きことなめりかし。得しと思ふものいかで得む。君は武夫なれば、弓射る事もて言はむ。よく引きてよく放つが外に、弓の道はなし。かくすれば、よく中るを知りても、さは出で來ぬはいかにぞや。勝負爭ふ時、人多く中てぬる折なんどは、唯それに勝たまほしく思ふぞかし。

また早く放つ弓の病もあり、放し得がたき病もあり。いづれも心の外なるものぞかし。また弓弦の弛みて、我が耳を打てば、いとど懲りに懲りて、又や耳を打たむと思ふぞかし。耳を棄つることも得せず、遲く放ち早く放つことだに心に任せず、人に負くるの口惜しさをも未だ棄て得ずして、いかでかこの身を忘れ給はむ。とにかく今は身に行ふことは積らで、口のみ高くなり行きぬ。あるやむごとなき人ありけり。劍の道を得てしとて、自ら世にならびなしとのみ、常にいひ給ひてけり。ある日書屋に居給ふ時、末の間の障子を開き、跳り出でたるを見れば、大きなる男のあかはだかになりて、君をめがけて飛びかゝるを、いで心得たりと、刀を拔きて切らむとすれば、跳り超え、あるは伏し、左へ避け、右へ走りなどして、いかにも擊ち得ず。とやかくするうち、すら〳〵と走り寄りて、その刀を取りてければ、口惜しき限りなく、如何にせむとあせり給へば、かの男疊にひれふしてけり。よく見給へば、外衞の臣下なり。その者のいふ、「君は劍の道よくは心得給へども、いまだもぬけし位にもわたり給はず、さる故に自ら負うて得てしとのみ思ひ給ふ。まことに得しものは、たれかよしと思ふべき。さる御心にてましませば、いかなる過ちかし給はむ。臣は劍の道さして習ひしにはあらねど、死をきはめてすれば臣をだに擊ち給ふこともなり難かりしぞかし。これをよく〳〵思ひ給はば、御身の過もあらじ。」と涙こぼしていひしかば、君も殊に感じ給ひて、わが無下に拙かりしことを悟り給ひしとぞ。よくこれらのことを聞き給ひて、悟とやらむの道はやめ給へ」といひしとかや。（四の卷）

一八　月なき夜半

月なき夜半はいと心の底澄みまさるものなりけり。海のおもて

沖漕ぐ船に云々
晴紅橋影ノ如タ出デ秋瓶捲雲ノ如タ來ル（白樂天）

暗うして、寄せ來る波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せぬ風の、袖にそよと吹きかふに、晝の暑さも忘れぬべし。秋はなほ蟲の音もきそひ行くに、千草の花の色も見えて、沖漕ぐ船にまがふ雁がねの渡るも、いづこなるらむとあはれなるに、浦のあしべに聲あはせたるもをかし。まいて曉頃に月の出づれば、宵の入日の殘れるたぐひにはあらず。海のおもて黃金の波の滿ち來るにぞ、言葉にも述ぶべしとは思はず。昔いぎたなくて、有明の月にうとかりし頃もありけりと思へば、口惜しきものから、又羨ましく思へり。それより思の移り行きて、實に古は惡しき波にも舟うけて、鰹釣りしこともありし、又はいと寒き頃、海に入りて鮑とりし事もありしが、今の若人はまだきに老いぬる樣するものぞ多き。その頃の昔物語に聞けば、浦曲の戰の恐しさに、妻子うち連れて、深山へ入りし世もありしと聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極めぬるは、いかにぞや。かゝる事も、かの若人の老いたる樣するをも、あはせていはまほしけれど、また例の老いぼれて繰言いふとやむづかりなむ。（四の卷）

日新
湯ノ盤ノ銘ニ曰ク苟ニ日ニ新ニシテ日日ニ新ニセバ又日ニ新ナリ（大學）

一九　日新の教

おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。「日に新なり」といふはものかは、事々にあらたに物々に新なるべし。昨日の事に馴れて思ひあやまるも、豫て知れる事と思ひて敗れ取るも多し。かの賢き人も、愚なる人に欺かるゝも、一つ〳〵に新ならねばこそありけれ。昨日憎しと思ふこと心に染み、去年の嬉しと思ふこと心につきて離れねば、それより根ざし迷ふとか聞けり。「げに日新の教こそ、萬づにかよはして身を終ふるまでも忘るまじきものなれ」と語りし

老人もありけり。（五の巻）

二〇　友に交はる道

「友に交はる道は、如何なることか心得べき」といふに、「友はその所長を友とすべし。古きことを好むには、その事に友とし、武技好むには、それに友とし、歌よむものには、その道に友とするぞよき。さるに歌とてもこの風は悪しけれ、かれに學び給ふは僻事なりなどいふにも及ばじ。たゞ交はりてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交はりといへども、この二人同じ徳、同じ心なりしにもあらじかし。世の中に同じ心の人といふものは、いと稀なることなるべし。ただわが好める方に引入れむとするもうるさし。この人、この所は長じぬれど、こゝはいと短かし。その短き所を引きのべむとするはいと苦し。さ思ふわれもまたその短き所あるものを、こゝに思

管鮑の交はり
齊の管仲と鮑叔との親交
管仲は我を生む者は父母我を知る者は鮑叔とまでいつた

同じ心
思ふこと盲はでぞたゞにやみぬべき我とひとしき人しなければ（伊勢物語）

知己
士ハ己ヲ知ル者ノ爲ニ死ス（史記）

しば〳〵すべき
子游曰ク君ニ事ヘテ數スレバ斯ニ辱シメラル朋友ニ數スレバ斯ニ疏ンゼラル（論語里仁篇）

ふこと皆諫めものせむとするを、かの僧と思ふはたがへりけり。交はるがうちにも、知己の人はいと稀なるものなり。それらよくことばを求めなば、もとよりいふべし。されどしば〳〵すべきにはあらずかし。淺き契の友なりとても、友といふうちならば、その人のうへの存亡にかゝはるばかりの事ならばいふべし。すべて強ひてかくせむ、かく救ひてむ、まげてもと思ふは、みな中道には背けりといはむ。たゞその所長を友とすれば、交はりがたき人もなく、われに益なき友もあらじ。かの友によてわが方の亂れむとするは、皆その短きを友とする故なり」と答へし者ありきとや。（五の巻）

二一　心猛きもの

人竝よりは聲高く、心強く愚なるものが、わが念ふまゝの事などいふを、いと理なき事と知りても、こなたも同じく聲あげて、爭はむも

益なき事なれば、そのまゝになしおくなり。さればいよ〳〵われば
かり理あるもののやうに思して、かの車を横に押し、舟を陸にとい
はむばかりになり行くめり。うしろにては笑ひ譏れど、爭ふにも
及ばざれば、知らぬ樣すればいよ〳〵高ぶりて、ぼうぞくの振舞なす
ものぞかし。まして惡しきも人にすぐれたるが、心強く理なきこ
とを押立てて、世をおほひ人をかすめて、暫く勝をとるもの、古の
書にも多きを見るべし。それによりても思ふべし、かの至大至剛の
浩然の氣、天地の間に滿つるてふこと、げにさもあらむかし。惡
しきも一筋に行ひて疑はざれば、一度は世を蓋ひぬるを。（五の卷）

至大至剛の浩然の氣
敢テ問フ何ヲカ浩然ノ氣ト謂フ曰ク言ヒ難シ至大至剛直ヲ以テ養ヒ害無ケレバ天地ノ間ニ塞ル（孟子）

二二　小民の歎

閉藏の氣一度變じて開け出づる頃は、必ず風吹き雨もはげし。又
暢びたる陽氣の一度變じてひそまらむとする折も、かくあるなり。
いかで雨風の花を妬み、紅葉の仇をなさむ。同じく降る雨なれど、
一重の花には早散りなむと怨み、八重の方には咲き初めむと待ち
ものし、「この雨いつか霽れなむ」と麥搗くものはいひ、「雨こそ嬉し」と
苗植うるものはいふらむ。麥搗くかたの雲をはらし、苗植うる空
は降らせむとは、いかであらむ。かの小民怨み歎くは、絶えぬもの
とやいはむかし。（五の卷）

二三　利害得失

事に處するに利害得失に心をつくるも宜なれども、まづそのこと
の筋をよく見て、さて利害得失をも照らし見るべし。世にいふ才
あるものは、まづ我が利害得失早く見ゆれば、利につき害に遠ざか
らむとのみして、その筋を失ふなり。「たゞ害ありとも、かくすべし」
といふはいといたう重き筋のことなり。さればその筋の重きと

輕きと、利害の重きと輕きとをかけ合はせても、その筋の方重きは、害にあふともその筋にしたがふべし。また才なくして筋にも暗く、たゞ一筋に心得るものは、筋の輕きにも重き害を得て、辭せじとするもありぬべし。才ありても道學びて明かなるにあらざれば、輕きを重しとして、遂に道失ふものこそ多かめれ。（五の卷）

二四　年經る鯉

年經る鯉のありけり。「いかにして樣々の事にもかゝり給はでかくまし〳〵給ふや」と問へば、「さらば語りものせん。かぐはしき餌のあれば、とめ來ても食はまほしきことながら、これぞ大事のことと心にしめて見れば、怪しき事あるものなり。さ思ひつくれば、鱠ふりて遠くのがれて、聊も顧みず、よその魚も怪しき事よと思へども、遠く去ることをせず。童なんどは、かの釣針てふ物にかゝりて、

川獺

いかほども取らるゝを見ながらも、とにかくそのかぐはしさに心つながれて、あたり離れず歩きて、心の中には愚なる魚どもは、皆かの餌に取らるれど、いかでわれはかれにものせられむと思へども、ひねもすこのあたりに漂ひぬれば、かの怪しき外に餌のなきにせんかたなく、立寄りて少し食ひてむなどするうちに、遂には懸かるもあるぞかし。また網といふものあり。ざと音しぬれば、四方みな網の目なり。こは如何にせむと思ふに、或はあわて騒ぐもあり、又は、何ばかりの事かあらむなど、賢き人をも侮りて、躍り上りて越えむとし、又は破らむとするを、人はもとより人なれば、樣々にあつかひて遂に捕るぞかし。われはかのざと音するを聞けば、心しづめて水底につきて離れず。網引は上の方を行きぬ。故に捕らることなし。川獺あしかなんどいふものもあれど、深く潜まりて隱るれば、その患もまぬがれぬ。また俄に雨降出でて、思ひよらぬ

瀧の白絲　きよたきの瀨々の白絲繰りためて山分け衣織りて着ましを（古集）

龍門　支那の黃河の上流にある瀑多くの魚はこれから上へ登ることが出來ないこゝを登る鯉は化して龍になるといふ

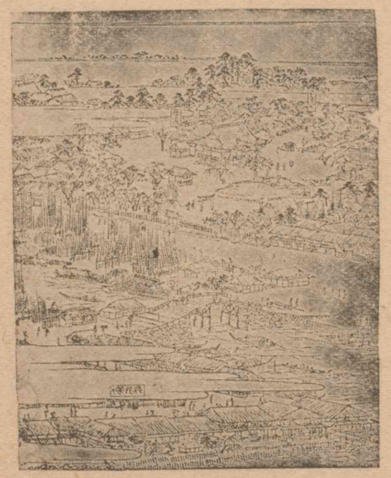
深川の八幡　今深川公園にある永代橋を東へ渡つて四百米餘

あたり、又は常いさゝか水の落つる岩が根などより、瀧の白絲くりためて、落ちそふ勢の激しさに、心も浮立ちて、かの龍門の瀧ならぬとは知りながらも、あまりに心地のよさにほだされて、その瀧を登るにぞ、あるは岩角に當りてきづつくもあり、辛うじて上りぬるも、雨やみぬればいと淺き瀨なり。歸らむ道も知らねば、深き處々たどり行くを、行く人などの見つけて捕るぞかし。かうやうの俄なる勢にも乘らずして、かく百年をも幾度か經にけむ」と語りき。（六の卷）

二五　心の神

深川の八幡の社の祭ある日、多くの人見にいきけり。二つ三つばかりの子を抱きて母の行きたるが、大きなる橋あり。渡らむとすれば、その子ひた泣きに泣いてやまず。橋を渡らじと歸れば泣きやみつ。「如何にしつることよ」とて、樣々にすれど、初めに變らず。

「先づさらばこゝらに憩ふべし」とて、橋の傍に居たるが、しばししてより落ちて、渡りかゝりし人千人ばかりも落ちしとなり。それと聞くより、かの母も覺えず涙落ちてけり。「いかにしてこの子の知りつらむ。神佛の助け給ひしなり」とて、伏し拜みつつ急ぎ歸りにけり。その子のみかは、その母も知りたれども、たゞ私の心に蔽はれて、照らし得ぬなりけり。もとよりその禍に遭ふものは、面にもあふれて、その惡しき色をあらはすべければ、心の神ははや照らしけむを知らざり



深川八幡
（江戸名所圖會）

しなり。こは蟲けらもその生くる道を求め、死すべきを厭ひて、殺すに心なきものには、狎れ近づく類は、これ自ら生々の德具へし、大空の御心にて、それを受け得し萬づのもの、皆かくあるべきことなり。されば占にあらはるゝも、龜燒きて見るも、皆天地の中にありとあるもの知らざるはなく、感ぜざるはなければ、ひじりも一つの敎とものし給ふとや。（六の卷）

二六　兩頭の蛇

昔兩頭の蛇（くちなは）ありしと聞けばとて、蛇の同じほどなるを捕へて、二つの尾をしかと結ひて離れざるやうにして庭へ放したり。一つは南の方の叢さして行かむとすれば、一つは北の方の林へ入らむとし、とみに行かむとのみして、一つ處にのみ居けり。たはぶれに下り立ちて驚かすれば、いよ〳〵挑み合ひて、一つ處にをどり居けり。いかゞすらむと折々見たるが、三日ばかり經て、二つの蛇やはらぎて、共に心をあはせ、尾のかたを繩の如くにして、頭を二つならべて行くにぞ、常のよりは遙かに速に這ひ行きけり。げに人も心の一つなれば、目も耳も心に從ひて見聞し、手足も一つ心なればこそかかりけれ。若し一つ〳〵の心ならば右の手は左の手を凌ぎ、左は右をそねみ、手して取らむとすれば、足はよそへ行き、左は左に行かむとすれば、右は右へ行かむとして、一つも人の事足ることはあらじかし。さるに古より國の司たる者ら、或はそねみ惡み、又は互に凌ぎなどして、たゞにわが威をふらむとするは、何の心にやあらむ。國家の事をよそにして、たゞわが身あることをのみ心とするにや。かくては亂れざる國はあらじを、わが身にのみかゝずらひてその事を思はぬは、たとへ何の才あり何の力あるものとても、何にかはせむ。（六の卷）

江都
東都江戸

その道によらしむ
子曰ク民ハ由ラレムベシ知ラレムベカラズ（論語）

二七　時と勢と位

政をなすも時と勢と位とを知るを要とすといふを、或人のいかのぼりに譬へし。江都にていはば、春を待ち得しは時を得しなり。風を得しは勢を得しなり。わが身は高き所に居て、四方の梢を見下して、絲を放つは位を得しなり。そのいかのぼりを持ち、絲など持つものあるは、人を得しなり。風のほどを見て、尾などいふもの、または絲などのほどを計り、引きつ緩めつして風待つは術なり。術といふものはいかのぼりを上ぐるの外ならず。別に巧みにすべきにもあらずかし。昏愚の下民を救はむとても、人ごとに說き、戸ごとに諭さるべきにもあらざれば、かりに術を設けて、その道によらしむることもあるべしといひしも聞えぬ。とにかくよき事にても、その功なきは、この三つを持ちつくる心の薄きなりとなむ

二八　鷹の羽蟲

鷹の羽に棲む蟲ありけり。空高く飛び翔る時は、遙かに人の住家などをも見下しつゝ、げにわれは事足れる身かな、翼も動かさで千里の遠きに行きかよひ、雲井のよそまでも揚るめり。殊に種々の鳥は皆恐れて逃げはしる。げにもわれに勝つものは大方あらじ。などと思ひつゝ、かの鷹の毛の中に居つゝ頻りに肉むらを刺し、血を吸ひて居しが、そのやからいと多くなりもて行きしにや、遂にその鷹もたふれにけり。

圖
鷹村雄（蟲譜圖藏）

それより自ら出でて、飛び翔らむと思へども飛び得ず、走らむと思へども速かならず。血も盡き肉むらもかれぬれば、今は命つなぐやうもなし。辛うじてまづその毛の中をくゞり出でて這ひ行けば、雀の子の居たりけり。われを恐れなむと見れば、雀の子は知らぬ様なり。いかにして見つけざるやと傍へ這ひ寄れば、うれしげに見て、嘴さしいだして喙まむとす。例なき事なれば、恐しくて逃げ隠れぬと、かの友どもに語りにけり。（六の巻）

二九　人の評

「唐土の君と臣との道は、わが國のとは違へれば、言ひわくべきことにはあらねど、范蠡が功遂げて後、船に乘りて去りしを、難きことの様にいへど、代々の功遂げし人の終よからぬより見れば、よしとはいはむ。されど船浮かべて去ることだにならば、難きことはあらじ」といふを、よきをばよきになして見給へ。よきをもその上のことをいひて責むるはいと悪しき心ぞや。ひじりならでは許す人はあらじ」と。（六の巻）

范蠡　支那春秋時代の楚の人越王勾踐の功臣で大富豪

三〇　花見

「今日はいとのどかなり。いでや隅田川原の花見む」と、小舟に乘りて行きたるが、花見むと立出づる諸人の様、げに都のみやびを盡くせり。さまゝの心々にうち群れて行くに、女房なども何か口たたきつゝ、心そらに歩くもあり。馬馳せて花をも目にかけず、いとばうぞくに行くもあり。やむごとなき人にや、人々うち圍みてつつましげに行く女もあり。或は木陰にてはや瓢傾け、何やらむ矢立出し書いつけ、紙縒して花の枝につけて、われは顔なる風情なるもあり。今日はげに晴れに晴れて一天に雲なく、富士も筑波も手

にとるばかりに見えたれど、又それをうち眺むる人もなし。さしてかく晴れたる日はとみに雨風のあるなどといふことは、つゆ思ふものもあらじかし。このののどかなる御代の春の御惠にぞ、かく心ゆたかに樂しび遊びて、かへさ忘るゝばかりしても、何のわづらひ憂もなきに、この花も昔より盡きぬ御惠深き露に生ひそひしとやらむと聞けば、さ思ふ人もありや無しやと見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の惠をば思ひもよらず、いつもかく空晴るゝものとばかりも思はぬ輩多からむなど思ひかへして、四方をふとうち見れば、筑波根のあたりいと細くひらめき

南島春景
安藤廣重筆（有尾敬重藏）

見捨てて
春霞立つを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる
（古今集伊勢）

たる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふ疾風などいふものなりけり。餘りに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねて蓑も笠もはなたで居しが、はや艪押立てて漕ぎ歸るを、いかに、この花を見捨てて歸るは、かりがねにつらさやならへる、艪の音ばかりまなべよかし。など口々に笑ふを、耳にも入れで漕ぎ去りぬ。いつかその雲のいと廣がりてけるが、かの輩はつゆも知らず。日のかげらふも知らず「今日は暑きばかりなり」とて、肌脱ぐもあり、又は衣など脱ぎて、馳歩くもありぬべし。雨に先だつ風の一通り吹落ちたれば、こは花よと思ふものもなく、いさご吹立てたれば、たゞ驚きて居るがうち、雨の降出でたり。初めは心地よき雨などともいひたらむか、後には人の聲に雨の音もせず、馬を馳せてかへるもあれば、驚きあわてて堤よりまろび落つるもあり。女などはいといたう見苦しきまであわてふためきて、はじめ裝ひしをもみづから夢と

や思ふらむ樣なり。まして酒に醉ひて濡るゝも知らず顏に笑ひなどするもあれば「思ひよらぬ愚なる雨かな」と怒りのゝしるもありぬべし。かの舟は早く漕ぎ行きぬれど、わが住む浦は遠ければ、とある橋の下に船とめて居しが、橋の上など人の走り騷ぐは、鳴神のやうに聞えぬ。はや雨もかぞふるばかりに川の面に見ゆる頃、夕月のことさらに新しくみがき出でたれば、はや雨の名殘もなし。堤の花いかゞあらむと漕ぎかへして見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間にほの〳〵と月の見えたるは、わが爲につくりなしけむと思ふばかりなり。濡れにし人はいかゞしたりけむ、この月などは思ひもよらであらむなど一人思ふも、何となく心おごり行きぬ。かぞいろも「われ一人人にこえて心地よきと思ふ時は」と戒め給ひたれば、又あやまちやしぬべくと恐しく覺えければ、飲み殘したる酒携へて、遂に漕ぎかへりぬとか。（六の卷）

かぞいろ
かぞいろはの略
愛稱

夢後集

解題

作者　村田春海、家の名は錦織齋通稱は平四郎、琴後翁と號した。江戸の豪商の家に生まれて、國學を賀茂眞淵に學び、これに沒頭して家業を顧みず、遂に財產を傾け盡くし文學風流を以て一生を送つた。文化八年（一八一一）歿す。年六十六。

成立　本書の序文に依つて明らかであるが、文化七年（一八一〇）に成立した。十五卷。異本等はない。

內容　春海の和歌と散文とを集めたもので、十五卷の中、初めから九卷までが和歌、十卷より十五卷までが散文である。その內容は春歌・夏歌・秋歌・冬歌・雜歌・題畫歌・長歌・記・序・跋・書牘・雜文・墓碑祭文等に分類してある。和歌は典雅にして優美の調を有し、縣門江戸派の歌風をよ

く表してゐる。散文も亦、眞淵門下に於て加藤千蔭と並稱せられただけあつて、行文流麗に雅致豐かにして、よく委曲を悉くしてゐる。

影響　琴後集の作者の如く、平素歌文に心を寄せ、正雅なる古代の言語に憧憬した學者の一群が、德川時代末期の擬古文作家であつた。そして彼等の此の擬古文尊重の主張は當時の復古思想と相通じて一つの時代の運動ともなつて大いに流行した。本鈔本の如き擬古文は恰も一見平安朝時代の隨筆の如く見えるが、その文章は古代の表現樣式を模倣し語法上の形式を整へることにのみ急であつて、その隨筆としての內容を豐かにすることにまでは進展を見なかつた。こゝに擬古文一般の特色を發見すべきである。琴後集は正にかくの如き擬古文作品群の一高峯をなしてゐるものであつて、かゝる意味に於て前後の時代に關聯を持つものである。

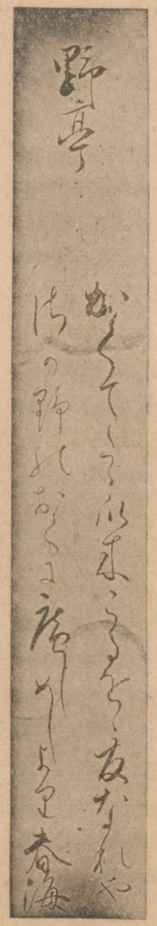
父
村田春道
國學者で賀茂眞淵の門下
明和六年(一七六九)
歿

筆蹟
野亭
かくてたゝ爪木こるをゝ友なれやさが野のおくに隱しめしより
琴路

今年
文化七年(一八一〇)
あづま
東琴
和琴
六絃の琴
絲なきを
陶淵明音律ヲ解セズ琴シテ無絃琴一張ヲ蓄フ
(琴曲)

一序

昔父の世にいますかりし時は、遊の道に深う心よせ給へりしまゝに、吹きもの彈きものなにくれの器ども家にあまた傳へたるを、年ごろ度々の火にあひて、今は多く失せもてゆきて、たゞあづま一つなむ、これをのみ昔偲ぶるくさはひには思ひたる。今年草の庵を改め造りて、小さき伏屋を、己がつねに住みならさむ所と定むるにつけて、思ひけるは、かのあづまこそおのが家の寶なれ、いかでこれに所得させて、その傍にこそ起き臥しすべけれ。われ琴彈くこと習はねど、絲なきをまさぐりて思ひをやりしためしもあればとて、



村田春道筆蹟

火とり　外側は木で内は陶器などで作り銅の蓋をかけた香爐

厨子　調度などを入れる棚扉のついた櫃

清水濱臣　國學者　名は玄長　春海の門人　不忍池の畔今の下谷區茅町に住んだ　文政七年（一八二四）歿　年齢十九

これをわがかたらひ人にて、さて琴がみに、硯一つ、火とり一つ、琴じりに、厨子一よろひをすゑて、年ごろの言の葉どもを入れたり。この頃己が心知りの人々詣來ていひけらく、「年頃ものし給へる言の葉どもはいかにし給ふぞ、かきあつめ給はましかば、われら筆たすけ參らせむ」といふ。「そは嬉しきことなり、さるは拙き言の葉を、人なみに世に殘し侍らむことは、恥かしきわざには侍れど、多年思をよせ、心をこめしものを、いたづらになしはて侍らむはほいなし。ともかくも然るべからむやうにとりなし給はむこそ嬉しけれ」と、答へければ、人々かの厨子より取出でて、書き集めもてゆく。「さて名をばいかに」といふ。すなはち「琴後」とこそいふべけれ」とて、その卷のはしつかたにぞ書きつけさせたる。

二　清水濱臣の泊酒舍の記

上野の岡　東京市下谷區上野公園に屬する岡

池　不忍池

月の御船　天の海雲の波立ち月の船星の林に漕ぎかくる見ゆ（萬葉集）

櫻　日のもとの春の光にさき出てもろこしとぼくにほふ花哉　濱臣

上野の岡の麓に池あり。この池の西なる方を萱がまちとぞいひける。こゝに蘆原刈りそけてつい建てたる伏屋あり。そはたゞにその池に臨みたれば、名をさゝなみのやとなむいふなる。そもそも霞たなびく春のあしたは、むかつをの梢をうつして花の鏡にむかひ、雁鳴きわたる秋のゆふべは、雲間の影をうかべて月のみふねをとゞめ、あるは蓮はな咲く夏の日、あるはみ雪降る冬の夜、折につけ時にしたがひて、見るめのあはれなむ盡きざりける。あるじは深くみやび好める人にて、四つの時のあはれをすぐさず、こをいにしへざまの言の葉にのばへて思をやり、またもろこしぶりの調にならひて心をしも慰めけり。かれ魂合へる人々、花にあくがれ

濱水濱臣筆

鳥の跡
文字

寛政七年
光格天皇の御世
（三百年）

林にやどるさゝぎ
鷦鷯深林ニ巢タヘドモ一枝ニ過ギズ偃鼠河ニ飲メドモ滿腹ニ過ギズ（莊子）

月にたどるも、つねにこの伏屋をなむ問ひ來にける。一日あるじのいひけらく、「世を經て絶えざるものは鳥の跡なり。いでこの屋の樂しみをも、人々とあひむつばへる心をも、永くうみの子のつぎつぎに傳へて、わが名代とせむ。事のゆゑよし記してよ」とあれば、すなはち筆さしぬらして、いさゝかもののはしに書きつく。寛政といふ年のなゝとせ神無月。（卷十）

三　知足庵の記

あはれ世のならはしこそはかなきものはあなれ。貴き賤しき品いと異りといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、たゞ足らはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢の嵐を恨み、月をめづるとては尾上の雲を厭ふためし、誰かはのがるべき。「林にやどるさゝぎは僅かなる小枝の陰をのみ頼み、流に水求むる鼠は、

梅尾の昔
茶の道をいふ鎌倉時代の初めに禪僧榮西が宋から茶の實を持ち歸つたのを僧高辨が分けてもらつて山城の梅尾に植ゑた

たゞ腹ふくるゝに過ぎず」とこそ、いにしへ人もいひつれ。かゝる理をだにわかたば、限りあるこの世に、かぎりなき事を思ふべきかは。

こゝに中村のぬしなむ、よく塵の世のけがしきをのがれて、蘆の軒松の樞に心の月をすましめ、花を摘むゆふべ、閼伽を汲む曉、み佛に仕ふる暇ある時は、氷を碎き、雪を煮て、梅尾の昔を偲ぶめる業にしも、心をなむ慰めける。これやこの世に求むべきすぢをも忘れ、また人を羨むべきふしをも思はで、おのが心から事足る業にしもあれば、かのいにしへ人のいひけむとことわりにこそかなはめ。いでやうつそみの世の、限りなき求めある際とは、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり。うべならうべな、この住家をしも足ることを知るとは名づけしこと。（卷十）

古の人　清少納言が枕草子に出てゐる「すさまじきもの、春のあじろ、八月のしらがさね」

四　隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、萬づにさま〳〵なれど、時にそむき折にあはで、つき〳〵しからざらむは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火のあたゝかなるを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。古の人も、春の網代八月の白重をこそすさまじきことの例には引き出でたりけれ。かゝればはかなきすさみも、折に合ひたるはをかしく、見所なき木草も、時を得たるはめづらかになむ覺ゆめる。

しかはあれど、人草しげき巷の、所せく門たち竝べたらむあたりには、時をすぐし、折を失ふたぐひ多くて、月に便よきは花に疎く、木に田あるは山遙にて、四の時の行きめぐるに隨ひて、心をやるべき住居は、いとも〳〵かたしや。

前田のぬし　前田夏蔭か　江戸の人　清水濱臣の門下　元治元年（一八六四）歿　年七十二

聞中大德　聞中上人　春海と深交があつた

安田躬弦　歌人　越前福井に生まれ醫を業とした　千蔭・春海らと深交があつた　文化十三年（一八一六）歿　年五十四

こゝに前田のぬしの高殿こそ、あやしく所得ては覺ゆれ。後は市路につゞくものから、前は世ばなれたるのぞみあり。春はむかつをの花のかをりを居ながら袂にしめ、夏はみなぎは清き池の蓮葉を舟ならずして手折り、秋は月にうそぶき、冬は雪に歌ふも、すべて山水のあはれをそへざる折なむあらざりける。ましてあるじの言の葉もて、友にまじらふこと廣ければ、時にふれ折を過ぐさず問ひ來る人々、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへに飽く世もしらぬ高殿なればとて、聞中大德の、殊更に時に隨ふてふことをもて名づけられたるは、深き心しらひにこそありけらし。（卷十）

五　安田躬弦の家の文臺の記

萬づの調度、古の跡あるものは、よそほひありてうるはしかれど、けぢかくもてならし難し。今の世に造り出づるものは、ことそぎて

桃青法師
松尾芭蕉

神路の山
伊勢皇大神宮の傍にある山

見所なけれど、取使ふに心やすし。この文臺は、ちかき世に桃青法師が始めて造り出でたる型なりとなむいふなる。法師は塵の世を遁れ出でて、假の宿に心とゞめざりし人なりとかいふめれば、古のよそほしき姿はまねばで、今の世の心やすきに從へるにこそありけらし。

又こは神路の山の杉の古枝を、木造りなせるなりとなむ。そはゆくりなくなししわざなめれど、これを思ふに、とりよそひうるはしからむは、大方に人の世の手ぶりにて、ことそぎて飾なきは、なかなかに神代のすなほなる心しらひあれば、この杉もて造れるを似げなしともいひがたし。とまれかくまれ、物は事足らばさてもありぬべきを、あまりに選り整へむとせば、失ふふしも出で來べし。

わが友躬弦のぬしは、古きみやびごと好む人なるが、なほこの古に跡なきさまなる物をも、あるにまかせて捨てざるは、心ありとやいはむ。檜の葉も祕色の坏も、物を盛るには心ひとしく、網代の屏風も錦の帳も、身をへだつるに異なるけぢめなければ、すべて物は一方をとりて、かたへをいひけつべきわざにはあらぬにや。（卷十）

六　山水のかたかける繪を見る記

うつせみの世に人のことわざ多かめれど靜けき窓の裏、幽かなる燈火の下に獨り居て、よくつれ〳〵慰むべきものは、たゞ繪と書との二つになむありける。下れる世に生まれ出でて、上つ世の人を心の友となすべきは書なり。足は都の中にのみ止りて、人の國の遙かなる境をもたゞに見るべきものは、うつし繪のたくみになむありける。かゝれば、古の書どもくりかへし見る暇には、名だたる山河のけはひを、うつし繪に忍び出でて、こを常に心やりぐさとぞなしける。かくおのが好める心を思ひはかりて、或人の見よとて

おこせしを見るに、山をたゝめること十まり五つ、たゞ墨がきにかきなしたるが、濃きは近く、薄きは遠し。そのまぢかく見わたさるるは、大木しみみに生ひ立ち、巖こゝら聳えて、道いとさかしともさかしく、かしこかる世の經がたきためしにいひけむからうたのこころこそ覺ゆれ。

かしこかる世
この世を渡ることの困難なることを蜀道の難に譬へて言つた
御間綿嶂トシテ崔嵬タリ一夫關ニ當レバ萬夫モ開ク莫シ
（李白蜀道難）

眉引の枕詞
妹をこそ相見に來しかまよびきの横山べろのしなす思へる
（萬葉集）

又遠く見やらるゝは、あるかなきかに雲霧立迷ひて、群れゆく鳥の翅も未だきえ〳〵なるに、夕日ほのかにほへり。古の書に眉引の如しといひけむは、只かくぞと先づ想ひ出でぬ。水の流一すぢ、その源をとむるに、幾千里の遠ともわかたず、又その落ちゆく末を望めば、何處をはかとも知り難し。その八十瀬のくまには、眞砂いと清らに、さゝら波よる渚あり、また岩打つ波高く立ちて、音聞くばかりなるに、舟いたくさしわづらへるあり。また岸のまに〳〵入り曲りて、水淀みて深きは、そこひも知らぬ淵なるべし。さて水を隔てて麓の方に、大きなる屋ども甍をつらね、ことゞ〳〵しき門おしひらきて、前には石を橋とせり。また水の此方には、あやしき萱屋立ち竝びて、おどろなる垣根ゆひわたせり。又こゝにかしこに人あり。あるは馬に乘れるも、あるはかちより行くも、あるは薪負へるも、あるは釣の竿もたるも、立ちたるも、居たるも、老いたるも、若きも、その儀いひも盡くし難し。まして木草何くれの物は、數へもあへむかは。かく遠じろき山川のすがたを、たゞ一ひらの紙のうちに、こまやかに心しらひしたるは、世になき筆の跡とぞいふべき。たゞかく珍らかなるを、いづれの國、いづれの處を、いつの世いかなる人のうつし置きけるなりとも知られぬこそ惜しけれ。これに對かへば、あからめもせずうちまもられて、飽く世なけれど、さはいへ、久しくとゞむべきならねばとて、そのおほよそを記し置きて、返しやりつ。（卷十）

春のゆくへ
たれとめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり（古今集　藤原因香）

七　花を惜しむ記

つれ〳〵と降りくらしたる長雨も、やう〳〵霽間おぼゆるに、かゝるゆふべをたゞにやは過ぐすべき。春の行方をも忍ばむ、花の名殘をも見ばや、いざ」とて、葎生の門おどろかすなるは、わが相思ふ人人なりけり。「さるはいづこの心ゆく方ならむ」といふに、かしこの御館、こゝの御園生、この頃のけはひ如何に見所あらむ」といふもあり、又「なにの山里、それの河づら、猶散り殘る陰をや尋ねまし」などもいふを、「いでかのやむごとなききはの塵もすゑじとおきてたらむは、春風の心もたどらで、あながちに朝夕かき拂ひなどすめるが、所につけては目やすきわざとも見ゆべけれど、かへりては情おくるるかたやいかでなからむ。又かの世離れたるあたりは、暮れゆく春のあはれもさこそ多かめれど、霞隔つる道のそらも、いと遙かな

羽生田
名は貴良

今日來ずば
今日來ずばあすは雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや（古今集）

るを、暮れかけてはなどか思ひたゝむ。さらばわれも人もあひむつばへる、羽生田のぬしの住居こそゆかしけれ。いざ給へ」とて、うちつらねて行くに、處せき巷の塵は、たゞ中垣の一重を隔てなれど、やゝ奥まりてのどかなる方をしめつれば、木立ものふりて、霞のたたずまひたゞならず、ましてあるじは古のみやび慕ふ人にて、なべて世の島好みてふ人の心ならひは學ばで、たゞおのづからなる山里の有樣をうつしたれば、はひりの方をばさながら畑に作りなして、なづなの花など露にうち亂れたる、いとつき〳〵し。垣根をめぐりては、田所廣くうちかへして、堰き入れたる水いと清らなるに、蛙の時知りがほに聲たてたるもをかしく、畔傳ひの道かたく〳〵にわかれたるには、花の木どもわざとならず植ゑわたせり。さるは夕日にもてはやされたる色香の、雨の名殘覺えて、心ありげに散り殘れる、「今日來ずば」とぞ見えたる。あるじは待ち喜べるけはひし

年に稀なる
あだなりと名にこそ立てれ櫻花年にまれなる人も待ちけり（古今集）

芳宜園
加藤千蔭の家の名

來てふにも似ぬ月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず（古今集）

るくて、年に稀なる」などロずさみつゝ、風を待つまの木の下におりゐて打語へば、おのづからうき世に遠きこゝちせらるゝを、誰かは市のかたへとは思はむ。かくて家路をさへ忘れぬべし。日入りはつれば塒にかへる鳥の音も別れ惜しみ顔に聞え、入相の聲かすかに傳ふるも、春を閉ぢむる心地して、夕闇の空も猶ふりすてがたしや。

かくながら花の木陰に月待ちていざもろともに散るまでは見む。（卷十）

八　八月十五夜芳宜園にて曇る夜の月を見る記

芳宜園の月のまとゐは、年ごとの契なれば、來てふにも似ぬ夜の樣なれど、今宵も例の人々まうで來にけり。さるは降りくらしたる雨の名殘、晴れゆかむ空も覺えず。ましてさやけき光待ち出でむ

夜の錦
富貴ニシテ故郷ニ歸ラザルハ錦ヲ着テ夜行クガ如シ（漢書）
見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり（古今集紀貫之）

は、いとゞ心もとなきを、更け行かばかくのみにはあらじを、今宵は寢で明してまし」などいひつゝ伊豫簾空しうかゝげて、空のみうちまもらるゝも、いとわりなしや。今宵は名におふ園生の花も、徒に夜の錦にて淺茅がもとの松蟲のみ、やう〳〵聲添はりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

晴間なき月をいかにといひ〳〵てそらながめにや今宵あかさむ

かきくらす雲間のかげはうとくとも月まつ蟲よせめてかたらへ（卷十）

九　初雁を聽く記

秋のけはひのうつろひ行くまゝに、野面のすまひぞ言はむかたなくをかしき。そともの小田の穂なみはかつ〳〵色づきそめて、雁

山を望めば
山ヲ望メバ幽月
猶影ヲ蔵メ砌ヲ
聆ケバ飛泉韓タ
琴ヲ倍ス
（和漢朗詠集
管三品）
露みていにし
春霞かすみていにしかりがねは
今ぞ鳴くなる秋
霧の上に
（古今集）

の本の小萩は、折得顔に綻びわたれる、露のにほひ、風のおとなひ、いづれあはれを添へざるなむなかりける。　さるは夕月のおもしろきを、たゞにやは過さむとて、蓬生の露打拂ふなるは、わがたまあへる人々なりけり。　伊豫簾高う卷けば、村雨の名殘の雲は絶間がちなるに、そこはかとなき外山のたずまひも、月影にもてはやされて、やう〳〵あらはれ行きぬ。「山を望めばかすかなる月」と口ずさみ出づれば、折しも峰飛びこゆる一行の聲さだかなるは、この鶴田に落つるなるべし。　げに萩のうは露もたゞならずなどいひしらふ程に、一人がいひけらく、「露みていにし雲路のなごりなく覺えしを、秋霧のうへに

雁　　繪
（蔵木寛畝筆）

世をうらみては
初雁の鳴きこそ渡れ世の中の人の心の秋し憂ければ（古今集）
中空に物を思ひ
初雁のはつかに聲をきゝしより中空にのみ物思ふかな（古今集）
玉梓のたより
秋風に初雁が音ぞ聞ゆなる誰が玉梓をかけて來つらむ（古今集）
この世を假とたどる
秋霧のはれぬ雲井にいとゞしく此の世をかりと言ひしらすらむ（源氏物語）

聲聞き初むるが、よにめづらかなる事はさらにもいはじ。すべて四つの時、花鳥の色香にそへて、はかなき言の葉をのばへ、すずろなる心を動かしつべきくさはひ多かる中に、世をうらみては人の秋を悲しみ、憂を嘆きては中空に物を思ひ、遠つ人を慕ふとては玉梓のたよりを待ち、雲水に身をたぐへてはこの世をかりとたどるも、折にふれ事につけつゝ、あはれさ似るものなくこそ覺ゆれ。いでやこよひの慰めに、このくさ〳〵の心によそへて、おの〳〵こととのばへ給はむなり」とあれば、澄みのぼる月影に對かひて、うそぶきいでたるは、こゝろごころの引くかたなるべし。

世を秋となきて過ぐなる初雁をわが身のよそに聞きやはつべき

となむあるは、世をあぢきなく思ふかたあるにや。

むねの雲いつかは晴れむ初雁のこゑもらすべきおもひならね

降りみ降らずみ
神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめなりける（後撰集）

ば
いかなる人のうへならむ。
旅衣いくたび秋をかさねましまた初雁のこゑを聞きつゝ
こは故郷を忘れぬ人なれば、
かりがねのおくれさきだつ一つらを定めなき世のたぐひとも
見む
法師めきたるロつきやと、人々いひあへり。（卷十）

一〇　山里の紅葉を見る記

都の旅居はおのづから心のとまりて、今年もいつしかと秋をさへすぐしにけり。降りみ降らずみ定めなき雲のけはひのたゞならぬにも、先づ西山のをかしさ思ひ出でらるれば、はやうあひ知れりける秋篠の朝臣のやどりをとて訪ひ來ぬ。この朝臣は、今はもゝ

嵯峨野
京都市上京區嵯峨町

大井の川
大堰川
待て言問はむ
後師よ待て言問はむ水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ（新古今集藤原資宗）

しきのつかさ位をしぞきて、嵯峨野の奥にうき世の塵をのがれ出でて、ひとり古のうま人の操になむならへりける。さるはあるじのおのづからなる心しらひもしるく、萱が軒端はたゞかたぶくまなるが、板間のしのぶのみ所を得て、おどろなる垣根は、かたへたえだえなるを、結ひだに添へねば、さらに野邊のけじめなむあらぬに、なほ野分の名殘覺えて、萩薄の心まゝに枯れ臥したる、今は男鹿の路さへ絶えにけりと見ゆるも、そゞろにあはれすゝまるゝ棲なり。

くやしく過ぎし昔の事どもうち語らふほどに、あるじのいひけらく、きのふ爪木のたよりに、總角が一枝もて來れるを見しに、露霜の色こそくまなくなりにけれ。いざたまへ。とあれば、うちつれて出でぬ。山路たどり行くほど、大井の川水ま近う見渡されて、波間をくだす瀨々の筏は、たゞ錦を積むかと目とゞめらるれば、「待て言問

亭子の帝
第五十九代宇多天皇

はむ」など口ずさみつゝ行くに、やがてみゆきばしとかいふなるを渡れば、嵐の山はたゞ手にとるばかり近きに、入日ほのかにほひて、空さへこがるばかりなるが、山風はるかに吹きおろして、道もさりあへぬまで散り來めるは、「またたぐひやは」とぞ覺ゆめる。かくて朝臣がからうたによび出でたるを、そのこゝろに答へて、

ゆくかたは紅葉をはしにわたすなり天の河原にわれや來にけむ

また、「昔亭子の帝の御舟とゞめ給ひし渚は、こゝぞ」といへば、

大御舟つなぐつなでのからにしきむかしおぼえて散る紅葉かな

橘の詰よりは北に、覺古りたる寺あるに入りていこひぬ。わたどのなど物さびて、拂ふ心なき嵐の庭は、苔路も見えぬばかりなるが、たゞこがねを敷けるやうなり。これなむ聞きわたる鑑寺なりける。やう〳〵暮れゆけば、今宵はこの御寺にこもりて、明日なむ高嶺の雲をわくべき」とて、朝臣が、

いざさらば紅葉かたしき今宵もやしらねのくもにやどはからまし

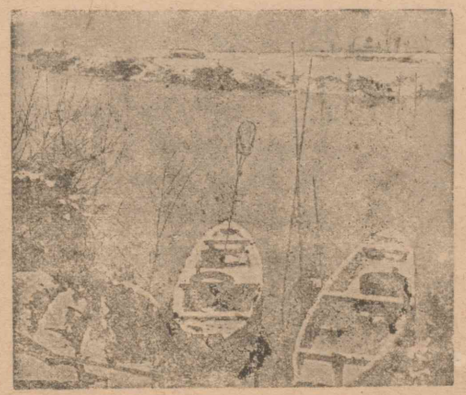
と思ふも、世捨人の心やすしや。（番十）

一一　雪をめづる記

かきかぞふ四つの時につけて、むらぎもの心をやるわざなむ多かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよろこぶ三つのならはしこそ、世にたぐひなきすさみとはすめれ。ことさへぐ唐人のためしにも、敷島の大和の國ぶりにも、高きも卑しきも隔つる事なく、古より今にかよはして、こを歌によみ、文に記してめであへるは、いづれを劣れりとも、いづれを優れりとも、品定むべきたぐひならぬは、

もとよりあげつらふべき事ならねど、處に從ひ、人によりて、おのがじし心のひくかたなくてやはあらむ。

梓弓春のあした、うら〳〵とひもときそむる花の心をとはむには、まづかしこの野づかさ、こゝの山里、露を凌ぎ、岩ほをたどりて、名ぐはしき陰を求めてこそ、類なきにほひをも見るべけれ。おどろなる垣ほのうち、あやしき伏屋の前に、ひと木ふた木を移し植ゑたらむは、なか〳〵に花のおもてをぞふせつべき。また眞萩咲く秋のさかり、隈なき月の光は、所をわかねど、あるは高殿の簾をかゝげて、千里の空を望み、あるは行く河の流にうかびて、水底の影を弄びてこそ、心の雲もはるくべけれ。小家し



みゝに立ちならび、はたばりなきはひりの庭に、うづくまり居て見むには、塵芥けがしさも、澄渡る光にいよゝあらはれ行きて、かへりては月うとかれとぞ覺ゆめる。かゝれば月と花とは、處がらこそあはれもうちそはるめれ。さるはかたゐ翁がたぐひの、しづたまき品賤しくして、うつゆふのさくくるしき住家にかきこもり居つつ、くさづつみやもひにのみかゝづらふ身は、かの高殿の望やかたのすさみは、いかでか思ひもかけむ。又野山の遊も、おのづから時に後れ、折を過して、常に心にそむくふしなむ多かめる。

かれ、雪ばかりはこの二つに異り、葦に閉ぢたる門のうちも、たゞ一夜のからに、玉敷く庭とうつろひ、あばらなる板屋が軒も、時の間に白銀をはやせるばかりに、姿もかへもて行きて、朝夕のいぶせさもさらに覺えず。また目なれたる市の巷も、たちまちに景色をそへて、いひ知らぬ山里の思をなし、行きかふあき人の蓑笠までも見所

上田秋成
國學者
通稱は東作
大阪に生まれ京都に住んだ
文化六年（一八〇九）歿
年七十八

市のうちに小隱ハ陵藪ニ隱レ大隱は朝市に隱ル（王康琚）

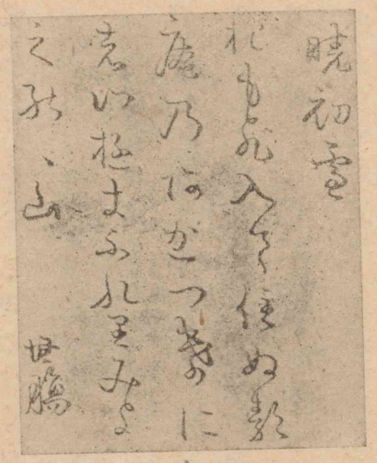
ありと覺え、はかなき木草萬づのものも、さながらめづらかなりとのみ目とゞめらるゝは、たゞ居ながらにして境を移し、處をかふるとやいふべからむ。かくてこそ心に足らはぬことなく、外に羨むべきふしもあらね。さればこの雪にのみ翁が心を寄するも、處に從ひ、人によりたる、老のすさみなるはや。（卷十）

一二　上田秋成がもとへ

春たちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。今は巖の中なるすまひをふり捨て給ひて、巷にたちまじらひ給ふらむは、いかに心ゆく御すみかならまし。

巣ごもれる谷の鶯いかなればみやこの春にこゝろひかれしとなむ聞えまほしき。されどうき世の塵の、のがれがたかなるもなほ市のうちに隱れけむ、古人の例にならひ給ふべければ、世のさが知らぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらむは、山住のつれ〴〵ならむよりはと、推量り參らするものから、徒に千里のよそにありて、萬づまのあたり聞え承らぬこそあかぬ業なれ。さはいへ雁の翅の行きかひだに絶えずば、なか〳〵に遠くて近きたぐひとや思ひなぐさみ侍らむ。柳の絲のくりかへしつゝ、今年もとだえなく、聞えまゐらばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音な惜しみたまひそ。

筆蹟
曉初雪
おもひ入て住ぬる庵のあかつきにしらゆきふれりみよしのの山
無腸



上田秋成筆
（尾上八郎藏）

一三　對月言志といふことを題にて書けることば

伊豫簾高うかゝげて、ふけ行く影をひとりうちまもりて、つら〳〵思ひみれば、おのづから心の塵も名殘なくて、なべて萬づのことぐさこそ、隈なく思ひ出でらるれ。　さるはちぐさの花に露のにほひを添へ、絲竹の音の響をすますらむたぐひの、艶になまめいたる、よのつねのをかしさをば、更にもいはじ。　いでやすみのぼる光の高くあらはれて、人の目とゞめむに、眩きばかりなるも、時の間に、あやなき霧のまよひにかきけたれて、たゞ闇かとばかりたどり、中空にしばしありと見ゆるも、やがて西になる事のとゞめがたきや。　うき雲のさだめなくて、きのふは榮え、けふは衰ふる世の有樣こそ、先づ覺ゆれ。　また淺茅が露に宿れども、所せくも覺えず、海原の波に浮かびても、廣きを知らざるは、高き短き、おのがじしのすみかのきはきはにつけて身の安かる心しらひによそへつべきもあはれなり。　また落ちたぎつ瀨々の白玉は、これがために、心清さをませど、

老となるもの
大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの
（古今集在原業平）

野澤の水の濁に宿りても、さらにみしぶのけがしさをきらはざるは、世に違ひ、時に逆ふことなくて、光をつゝみ、跡をかくすとかいふらむさかし人の心の奥さへ汲み知られぬべし。　又有るを有りとも見ず、無きを無しとも定めあへぬ、ひじりごころのさとりも、たゞこの光を磨きてこそ照すべけれ。　かゝれば、いたづらにわが世のかたぶくを嘆き、老となるものとのみうち眺めむは、いともいとも心あさしや。

おほかたに見てやは過ぎむ空の月ちゞに心をおもひよせなば
（卷十四）

一四　月花のあはれをことわることば

花をめづらしみ、月をあはれむならはしなむ、流れての世はさらなる。　その源を考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りける。　花に心

若櫻の宮
第十七代履仲天皇の皇居
朝倉の宮
第二十一代雄略天皇の皇居
藤原
第四十一代持統天皇及び第四十二代文武天皇の皇居
奈良
平城宮
第四十三代元明天皇以後第四十九代光仁天皇まで七代の天皇の皇居

月の行方を云々
月影は入る山の端もつらかりき絶えぬ光を見るよしもがな（新勅撰集源季廣）

を慰めませしは、若櫻の宮に始まり、月を言の葉にかけ給へるは、朝倉の宮よりなむ聞えたる。しかありて後、藤原・奈良の御世に至りては、歌人多く出で來て、かたみにみやびをかはし、こゝろ〳〵に思ひを抒ぶること皆月花をもて心の種とぞなしたりける。かくて世の移るに從ひて、このすさみいよ〳〵盛になりもて行きて、あるは物思なき春を花に悅び、かはる老を月に歎き、あるはさかしきも愚なるも、たよりなき處に花をたづね、知るべなき闇に月をたどり、あるは花の命を神に祈り、月の行方を佛に契り、また下が下なる薪こる山がつ、いぶせき伏屋の賤の女までも、月と花とに心を寄せざるなむあらざりけらし。

さるはかけまくもかしこき、大御遊の、際異るが中にも、月と花とのためには、時に臨みて、ことさらに宴の筵を設け給ふこと捉たがはず、のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさまざまなる世々の跡を見るに、古も今も、高きも短きも、月と花とをなつかしみ思へること等しくて、いづれを餘れりとし、いづれを足らずとして、一方に心よせたる人誰かはあらむ。しかるを、今にありて、そのよしあしをことわりいはむは、人笑へにもなりぬべし。しかはあれど、これをことわるに故あり。その劣り優りは、もとよりかれにはあらざめれど、おのがじしうち見る人の、身にたぐへ思はむにはそのよる方いかでかなからむ。

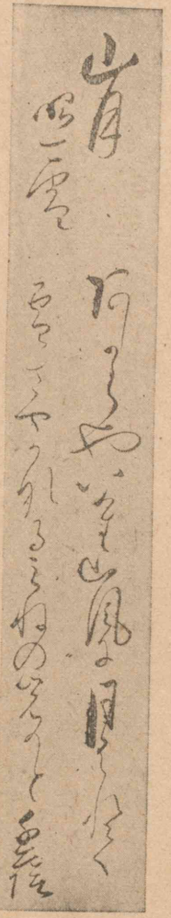
そも〳〵花は春にありて、にぎはゝしきにより、月は秋にありて、悲しみをぞ起すなる。今このくち翁が心にとりていはば、身既に老いにたれば、つぼめる花の盛待ち出でむ樂しみもなく、品いやしければ、花々しき世を經て、時にかをらむ願もかけず、たゞ鏡にうち對かふ折しも、頭の霜を見ては、月の影かと驚き、傾く齡を思ひては、入り方の月ぞ身によそへつべき。かゝれば、花にはおのづからにう

頭の霜
朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪（古今集坂上是則）

とく、月にぞ心の引かれける。さはいへ、こはわが身一つのすさみなり、大凡人のためには、いかでかまねびも出でむ。（卷十四）

一五　芳宜園大人の墓を祭る文

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝を手向け、香の木一片を焼きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも、君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、いまそのかみを思ひ出づるに、君はなさに盛りの齢におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、朝にまゐるとては、君のみはかし



筆蹟　山月照雪　あしがらやいく山風に月はれて雪さやかなるみねの岩かと　千藤

加藤千蔭筆

のしりへに從ひ、夕にまかるとては、君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること親子はらからにもなにかことならむ。書讀むとては、君を師とも尊み、歌作るとては、われを弟のつらにぞ訓へ給ひける。中頃にして、君は仕への道にいとなくおはし、われは世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給ひて後は、われも同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては、われ道しるべをなし、月を思ふとては、君が舟にあひ乘り、憂き事も俱に憂へ、嬉しきふしも俱に喜びて、世にありふるわざの、まめ事も、あだ事も、かたみに隔なく心をかはせること今に二十年、その初をくりかへし數ふれば、あひ友たることすでに五十とせにぞあまりける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にかあひみむ、いづれの時にかことはむ。常なきは人の身の習ぞと知るも、これをいかでか嘆かざらむ。かゝるを誰かはよく堪へむ。あはれ悲しき

言の葉の道
和歌の道
くひぜを守り
宋人田ヲ耕セル者アリ田中株アリ兎走リテ株ニ觸レ頸ヲ折リテ死ス因リテ其ノ耒ヲ釋リテ株ヲ守ル兎ヲ得ンコトヲ冀フ兎復得ベカラズ而シテ身ハ宋國ノ笑トナル（韓非子）
舟にきだつくる輩
楚人江ヲ涉ル者アリ其ノ劍舟中ヨリ水ニ墜ツ遂ニ其ノ舟ニ刻シテ曰ク是吾ガ劍ノ墜ツルコトハ舟止リソノ刻スルトコニヨリ水ニ入リテ之ヲ求ムル舟已ニ行キ而シテ劍行カズ劍ヲ求ムルコト此ノ如クンバ亦惑ヘシカラズヤ（呂氏春秋）

かも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々にくだり行けるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古にかへり、青雲の高き心しらひを求め、倭文機のあやあるみやびごとを尊みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくるともから、かれになづみ、こゝにひかれて、猶あやしみ咎むる類は多く、魂合ひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君獨り心を起して、あまねくさとし、廣く誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌、世に盛りになりたるは、誠に君の力によりてなり。そのみづから詠み出で給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とり〳〵に具らざるはなし。その古をうつせるは、藤原・寧樂の御世に及び、後のたくみにならへるは、堀河・鳥羽の御時にくだらず。心に思ふ事は、口に盡くさざることなく、目に觸るゝものは、詞にのせざることなむあらざりける。これを見て、高きも短きも、めで尊まざる人なし。又ことごのみの人は、

堀河・鳥羽の御時
堀河天皇・鳥羽天皇の御時

その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君の一うたを得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深く喜びける。しかるを今こがねの聲忽ちやみて、玉のひゞき再び聞えずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大方の世人のうれひともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ。かゝるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかくことあげするを、泉の下にもさやかに聞し召し、天かけりても遙かにみそなはせとなむ申す。（卷十五）

玉勝間花月草紙琴後集鈔

終

昭和十三年十二月六日初版印刷
昭和十三年十二月九日初版發行
昭和十四年二月五日訂正再版印刷
昭和十四年二月八日訂正再版發行

玉勝間花月草紙琴後集鈔
定價金五拾五錢

著作者　吉田彌平
補訂者　石井庄司
發行者　東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者　山本慶治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社
百村勳
發行所　東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

（檢印）　吉田玉勝

社會式株給配版出本日　元給配
東京市神田淡路町二ノ九